

42559

教科書文庫

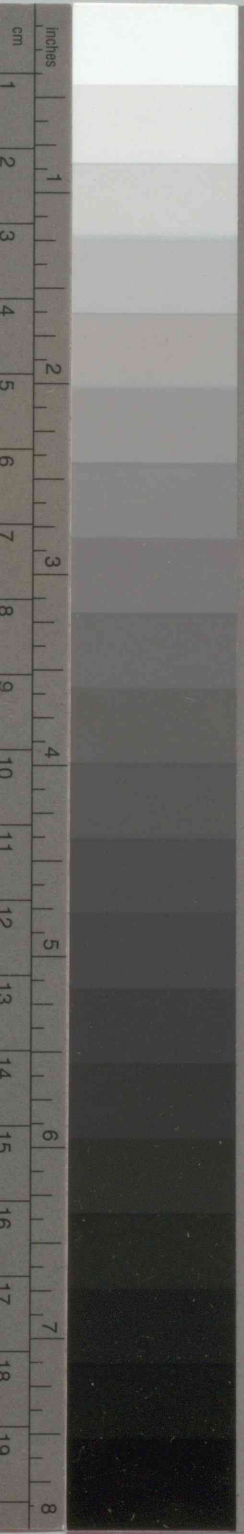
4
810
51-1911
20000 21598

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

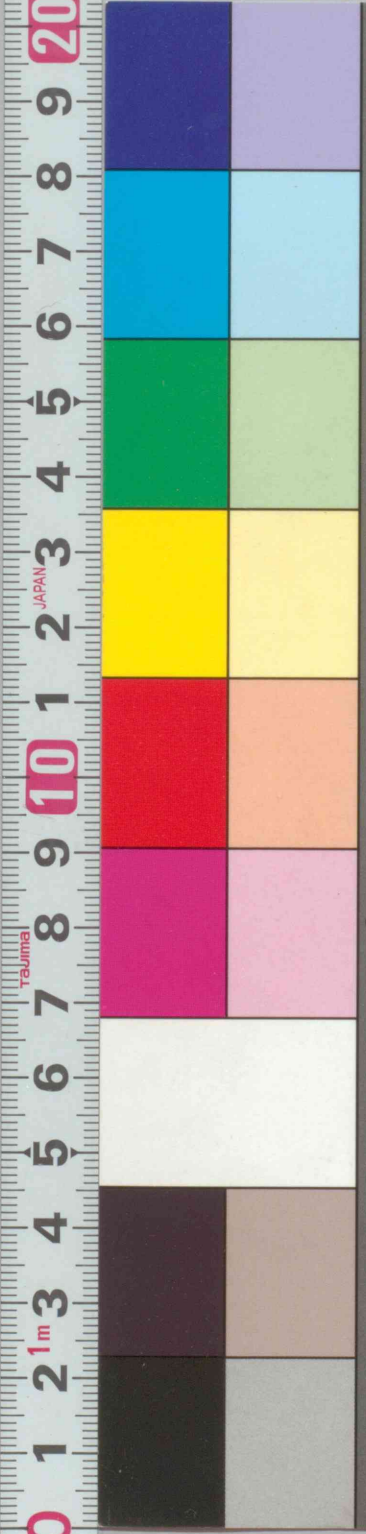
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



375.9  
Ue4  
資料室

國文抄本 駿臺雜話

上田萬年編

全





書大唐

明治四十四年三月二日  
文部省檢定  
師範學校・中學校國語教科書

大日本圖書

文學博士上田萬年編

國文抄本  
駿臺雜話

東京大日本圖書株式會社



はしがき

この書は駿臺雜話を抄したるものなり。駿臺雜話は、室鳩巢の隨筆にして、その文章は雅健にして精細、その載する所は、凡そ鳩巢が門弟子に向ひて、講學の間に、道德・政治・經義・文學・人物・世事等につきて説話せし所を録せるものとす。

著者室氏、名は直清、字は師禮、鳩巢又は滄浪と號す。萬治元年皇紀二三八江戸に生る。幼時より聰悟、十四歳の時、加賀侯に召されて大學を講ず。侯その明敏に感じて、祿を與へ、學に京都に就かしむ。乃ち木下順庵、羽黒成實等に學びて、朱子學を主張す。二十九歳にして加賀に移り住す。元祿十五年赤穂の遺臣復讐の論、諸儒に異同あり。鳩巢即ち義人録を著し、斷然之を義とし、人臣の儀則を明らかにす。五十四歳



にして新井白石の薦によりて、幕府の儒官となり、邸を江戸の駿河臺に賜はる。因つて世人駿臺先生と稱す。吉宗將軍となり、親しく之に政事を諮ふ。晩年病を以て家居願養し、其の時駿臺雜話を著して之を獻す。享保十九年歿す。年七十七。鳩巢、性忠信篤敬、深く人に尊重せられ、幕府の信任甚だ厚く、嘗て命を受けて六諭衍義大意を述ぶ。幕府之を天下に頒布す。鳩巢の著書甚だ多し。

國文抄本

駿臺雜話 目次

一	老學の自叙	一
二	愚公が山	六
三	老僧の接木	九
四	葉公の龍	一一
五	忠厚の心	一八
六	武運の稽古	二二
七	天人相勝つ	二七
八	朝顔の花一時	三二
九	仁は心のいのち	三七
一〇	杉田壹岐	四四
一一	士の節義	五〇



一 手折りし枝に吹く春風……………五五

二 燈臺もと暗し……………六六

三 泰時の無欲……………七七

四 武田信繁……………八二

五 大敵外に無し……………八六

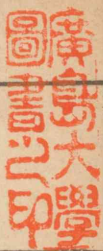
六 月は世々の形見……………九四

七 倭歌に感興の益あり……………一〇〇

八 言は身の文……………一〇八

九 壬子試筆の詞……………一一六

附録 鳩巢在世時代略年表 鳩巢在世前後諸儒  
學統略譜



國文抄本 駿臺雜話

一 老學の自叙

(一)初めて髪を結ぶとは少年期に入るをいふ  
(二)寛文十二年春加賀侯召して大學を講ぜしむ  
(三)貞享三年夏加賀に移り住す  
(四)正徳元年春江戸に徵されて幕府の儒官となる  
(五)此の語は禮記の檀弓篇に「狐死正丘首」あるより

つら／＼身の過ぎ來し昔を思ふに、もとは武藏の産にてな  
んありける。そのかみ初めて髪を結びて、詩書を事としてよ  
り以來、或は檄を捧げて藩邸に遊事し、或は笈を負ひて京師  
に旅食す。其の後北地に家居せしかば、常に舊學を修め、素願  
を償ひて、一生を終ふる事をなん計りにし。然るに往年圖ら  
ざるに、大家の徵を辱うして、再び故郷に歸り住せしが、身老  
い材腐ちて、やがて丘に首する死を待つ程になんなれりけ  
る。されば多くの歳月を経て、今犬馬の齡七十に餘る四つの



出づ其の本を  
忘れざる暇に  
て鳩巢が晩年  
故郷に歸り住  
めるをいふ

(六)宋儒とは  
二程子朱子等  
の性理學派を  
いふ二程子は  
兄の程明道と  
弟の程伊川と  
にして朱子は  
朱晦庵なり

年まで、學を好み道に志すと雖も、人の師表となるべき道德もなく、また外に何の材能もなくして、空しく世にあるこそいと本意なき事なれ。されど翁を信じて、こゝに問ひ來る人々に、日ごろ自得したる事を語りきかせて、後學の便ともならば、それこそ、せめてながらふる甲斐もあるべけれど思ふにぞ、病を力め痛を忍んで、たえず書を講ずるにてありける。或日講はて、宋儒以來學術の異同に及ぶ。座中に程朱の學に疑を貽す人ありしに、翁のいふやう、某も若かりし時、俗儒に習ひて記誦詞章を學びて、多くの年月を曠しうせしが、或時忽ち往日の非を悟りて、始めて古人己が爲にするの學に志ありしかども、不幸にして良師友もなかりしかば、諸儒紛紛の説に眩惑して、程朱をも半ば信じ半ば疑ひつゝ、定見な

かりし程に、とかくして又空しく歲月を經にけり。年四十に近き頃にもあらん、深く程朱の學終に易ふべからざる事を悟りて、それより日夜程朱の書をよみて、心を潛め、思を覃うする事、今に三十年、仰げば愈、高く、きれば愈、堅く、高遠に過ぎず、卑近におちず、聖人復た出づとも、必ず其の言に従はん事疑なし。されば天地の道は、堯舜の道なり。堯舜の道は、孔孟の道なり。孔孟の道は、程朱の道なり。程朱の道を捨て、孔孟の道に至るべからず。孔孟の道をすて、堯舜の道に至るべからず。堯舜の道をすて、天地の道に至るべからず。老學固より信ずるにたらぬ事には侍れども、是ばかりは實見ありて申す事にて侍る。もし實見なくして、さもなくば事を申すならば、翁が身忽ち天地の罰を蒙るべしと誓ひけるにぞ、座中も



聽きを改むる氣色なる。其の時翁いふは、是は五百年來論定  
 まりたる事なり。今更翁が誓を待つべきにもあらず。朱子以  
 後、宋には眞西山、魏鶴山、元には許魯齋、吳草廬、明には薛敬軒、  
 胡敬齋の諸賢を始め、其の外道學に志ある人、程朱を尊信せ  
 ざるはなし。一代の碩學たる事、宋潛溪が如く、百家を綜核す  
 る事、楊升庵が如き、文字論說の末に於ては、程朱を議すと雖  
 も、學術道德に於ては、間然する事をきかず。されば明の中葉  
 までは、おほやう世の學術も正しく、名教も頽れざりしぞか  
 し。王陽明出でて、良知の學を唱へ、朱子を排せしより、明の學  
 風大いに變じぬ。陽明既に歿して、其の徒王龍溪の如き、終に  
 禪學となる。それより世の學者良知に沈醉し、窮理に欠伸し、  
 其の弊嘉靖萬曆の間に至りて、天下の學者、陽儒陰佛の徒と

(七)名は德秀  
 (八)名は了翁  
 (九)名は衡  
 (一〇)名は澄  
 (一一)名は瑄  
 (一二)名は居  
 仁  
 (一三)名は濂  
 明の人  
 (一四)名は慎  
 明の人  
 (一五)名は守  
 仁  
 (一六)名は畿  
 (一七)嘉靖は  
 明の世宗の年  
 號萬曆は明の  
 神宗の年號

なりてやみぬ。諸賢よく思うて見給へ。西山以下の諸賢、たと  
 ひ汗下なりとも、好む所に阿るには至らじ。又其の德行材識、  
 何れも明季、並に今の儒者の下にあるべきに非ず。それに程  
 朱萬分の一にも及ばぬ學識をもて、輕々しく、なにくれと譏  
 議するは、鵝の鵬を笑ひ、蠶にて海を測るに似たり。韓愈がい  
 はゆる、井(一八)に坐して天を觀て、天は小なりといふの類なり。然  
 るに輕薄無識の徒、其の説の新奇なるを喜びて、雷同互鳴す  
 る事、あげて數ふべからず。國家百年以來、太平久しく、文化日  
 に開けて、師儒世に輩出しけり。其の學の是非はしらず。たゞ  
 程朱を堅く崇信して、ふるき模範を失はざりしをぞ、一つの  
 幸とせしに、近き比、備作る人ありて、始めて一家をたて、徒弟  
 をあつめしより、老姦の儒出でて、其の上に立たん事を欲し、

(一八)原道に  
 見ゆ



(一九) 與孟  
尚書「書」の事  
なり

猖狂の論を肆にして忌み憚ることなし。一犬虚を吠ゆれば、  
群犬之に和する習なれば、邪説横議世に盛なるこそ、理にて  
侍れ。誠に此の道の厄運ともいふべし。されば韓愈も、佛老盛  
に行はれし時に生れて、獨りこれを排斥して、自ら孟軻に比  
せしが、其の孟簡（一）に與ふる書をみるに、「天地鬼神、臨之（二）、在上（三）、質（四）  
之（五）、在（六）、傍（七）」とは誓ひしぞかし。翁が誓も、孟子の功にこそ及ばず  
とも、韓愈が心には劣り侍るまじ。あなかしこ。かりそめの空  
言とおぼすべからず。

### 二 愚公が山

翁が心は、知己を一世にもとむるにも候はず。昔より邪僻妄  
誕にして、根もなき事の、さかんに世に行はれて、あなかしが

(一) 秋の野に  
なまめき立て  
るをみなへし  
あなかしがま  
し花も一時  
(古今集)

(二) 周の列禦  
冠列子を撰す  
愚公の事は同  
書の湯問篇に  
見ゆ

ましく聞ゆるは、女郎花の一時とや申すべき。大方はつゞか  
ぬものにてこそ。世を歴て正道にかへらぬはなし。しかるを心  
短くして、早く其の驗を見んと思ふは、未練の事といふべし。  
諸君、列（一）子が書を見たまへりや。愚公といひし人ありけるが、  
家居近く山のありしを厭ひて、わきへ移さんとて、日々に子  
供引き具し出でつゝ、手づから耒耜をとりて一簣づつ、こぼ  
ちとりけるを、智叟といひし人を見て、「かく大いなる山を、  
僅かなる人の力にてこぼてばとて、こぼちつくさるべきか」  
と、其の愚かさを笑ひければ、愚公きゝて、「わが代よりこぼち  
そめて、わが子の代にも繼ぎてこぼち、わが孫の代にも、又其  
の子の代にも繼ぎてこぼちなば、終にはわきへ移さぬ事や  
あるべき」といへば、いよく笑ひけり」となんしるし置ける。



もとより寓言なれば、この人あるにはあらねども、愚公がいふやうなる事は、世に愚なりといへば、愚公と名づけ、智叟がいふやうなる事は、世に智なりといへば、智叟と名づけたるならし。およそ天下の事、愚公の心ならば、おそくも一たびは成就すべし。然るに世に智ありと稱するほどの人は、おほかた智叟が心にて、愚公が山を移すやうの事を聞きては、その愚を笑ふほどに、何事もその功を成就せぬなるべし。然れば世のいはゆる愚は反つて智なり。世のいはゆる智は反つて愚なり。それ故に禦寇が世を諷してこそ斯くはいひつらめ。今翁も百年論定まるの日を身後に期し侍れば、世の明智なる人よりみては、翁が迂濶なることを笑はるべし。されど老い僻めるにやあらん、此の志を守りて身を終へなんとこそ

思ひ侍れ。愚公が山を移すの類なるべし。

三 老僧が接木

されば是につけて思ひ出す事あり。忍ニ岡のあなた、谷中の里に、何がしの院とて、一つの眞言寺あり。翁いとけなかりし頃、其の住僧をしりて、しばし寺に行きつゝ、木の實拾ひなどして遊びしが、住僧かたへの人にもかひて、前住の時の事をなん語りしを聞き侍りしに、寛永のころの事になん、將軍家ニ谷中わたり御鷹狩のありし時、御かちにてこゝやかしこ御過ぎがてに御覽ましましてけるが、此の寺へも思ほえず渡御ありしに、折節其の時の住僧は、や八旬に及びて、庭に出て、みつはくみつゝ、手づから接木して居けるが、御供の人々お

（一）忍ニ岡は今の東京上野野公園の地

（二）將軍徳川家光

二 老僧が接木



れ奉りて、御側に二人三人つき奉りしを、中々やんごとなき御事をば思ひよらねば、そのまゝ背き居たりしを、坊主何事するぞ」と仰せられしを、老僧心にあやしと思ひて、いとほしたなく、「接木するよ」と御いらへ申せしかば、御笑ひありて、老僧が年にて今接木したりとも、其の木の大きになるまでの命も知れがたし。それにさやうに心をつくす事不用ふようなるぞ」と上意ありしかば、老僧御身は誰人なれば、かく心なき事をきこゆるものかな。よくおもうて見給へ。今此の木どもつぎておきなば、後住の代に至りて、何れも大きになりぬべし。然らば林もしげり、寺も黒みなんと、我は寺の爲を思うてする事なり。あながちに我一代に限るべき事かは」といひしをきこしめして、老僧が申すこそ、實にもことわりなれ」と御感

(三) 徳川家の五徳葵の紋

(四) 國語の晋語に曰く「晉先大夫臧文仲其身沒矣、其言立於後世、此之謂死而不朽」

ありけり。その程に御供の人々おひくゝ來りつゝ、御紋の御物ども多く集ひしかば、老僧それに心得て、大いにおそれて奥へ入りしを、御召し出しありて物など賜はりけるとなん。今、翁も此の老僧が接木する如く、老い朽ちぬれども、あるかぎりには舊學を究めて、人にも傳へ書にも残して、後世に至りて正學の開くる端にもなり、此の道の爲に萬一の助ともなりなば、翁死しても猶いけるが如し。古人のいはゆる「死しても骨朽ちじ」といひしこそ、思ひあたり侍れ。いさゝか我が身の爲に謀るにあらず。諸君も翁が此の心を信じ給へかし。

四 葉公の龍

しかれども斯く申せば、翁が身、物に似たるやうにて、はづか



(一)六經は詩經書經易經春秋禮記樂經をいふ但し樂經は亡びたり

(二)孔德璋の北山移文に「其林慙無盡澗愧不歇」とありても周彦倫の偽行を譏りし語  
(三)葉公の龍の話は新序卷五に見ゆ

しくこそ候へ。翁わかゝりしより、心に聖賢をしたひ、口に六經を誦し候へども、たゞ載籍の上にて、聖賢を窺ひて、少々其の意を得たると申すばかりにて侍る。今もし眞の聖賢にあひ奉りなば、日頃慕ひ奉りし心とちがひ、反つていみはゞかる事あるまじきや。心もとなくこそ候へ。すこしもいみはゞかる事ありなば、今申す事も皆偽になり、林慙澗愧盡くべからず。又何をもて後世を待ち候へきや。昔葉公龍を好みて其の形を畫がかせて日夜愛翫せしが、或時眞の龍之を聞きて、畫がける龍をさへ、さやうに愛翫あるに、わが行きたらんに、ことなるもてなしにもあひなんと思ひ、窓より顔をさし入れたれば、葉公大さにおそれ、にげまどひけり。今東西兩都の儒者をみるに、多き中には正學の志ある人もあるべけ

(四)二子は晏嬰と蘇軾とさす

(五)王莽漢帝の位を簞ひ國が新と號す後に漢兵に滅さる

れども、大かたは自ら尊大にして師儒と稱しつゝ、我こそ聖賢の道を好めといへど、たゞ論説をつとめ、著述を衒ひ、是をもて世に傲り、名を釣るには過ぎず。元より道に實得の功なければ、もし眞の聖賢にあはゞ、目をかへして相見んとぞ覺え侍る。然らば日ごろ聖賢の道を好むといふは、葉公が龍を好むに同じかるべし。晏嬰が仲尼を毀り、蘇軾が程頤をにくむと考へ見給へ。ひとり齊の賢人、ひとりは宋の名臣にて候へども、それさへかくのごとし。況や二子に及ばざるものをや。されば漢の揚雄、道德を論じ、太玄を著し、一代の儒といはれしことも、一旦賊莽に臣とし事へて、節義を失ひしぞかし。たとひ莽が世に生れずして、此の事なくとも、是等の學問にては、もし孔孟にあうて、節義の守をもて責められなば、必



(六)揚雄字は子雲  
(七)朱子の通鑑綱目に「莽太夫揚雄卒」とある語を用ふ

(八)あづまへ行役すとは江戸へ参勤するをいふ

ずにげさけぬへし。然らば太玄五千文皆虚文にあらずや。後世の子雲ありて、我を知らんといへど、後世<sup>そ</sup>莽が太夫ありて知音たらんかし。この故に言論のみを聞きて、その實迹を見ざれば、世話に「はたけ水練」といふごとく、仕かたばかりにては人信じがたきものなり。はや三十年前の事にて侍る。加賀の國に杉本の何がしとて、一人の微賤の士ありき。翁その人を久しく知りけるが、其の子九十郎といふ者、十五歳の時、父はあづまへ行役しける其の跡に、年輩同じ程なる近隣の子と、圍碁の上にて口論しけるに、九十郎こらへず、刀を抜きて相手を一太刀きりしを、かたへの人取りさへけり。さて其の事廳に達して後、相手の創療治さすべしとの事にて、其の間九十郎は官長の家に預り置きしに、臆したるけしき露

ほどもなく、言語振舞の落ちつきたるは、なか／＼年におはぬやうに見えける。日を経て相手終に創にて果てければ、九十郎も切腹するに議定しける程に、その前の夜、主人名残を惜しみつゝ、酒肴いろ／＼用意してもてなしけるに、九十郎母への文などしたゝめ置き、さて主人に委しく謝詞をのへ、此の程付き居たる家人へも、それ／＼に懇に暇乞して、さていひけるは、面々へ名残も惜しく候へば、こよひは明るるまでも語りたく候へども、あす切腹の時ねぶたく候うては、如何と存じ候へば、先へふせり候へし。面々は是にてゆる／＼と酒すゝめられ候へ」とて奥へ入りて高軒して睡るを聞き、跡に居たりし人々感じあひけるとぞ。又の日つとめてよき程におきいでて、沐浴し衣服あらためつゝ、ようい<sup>用</sup>心靜が



にし、その後切腹の席へいでて、檢使に一禮し、心よく切腹しぬ。其の有様従容として安らかなりし。いかなる勇烈老功の士たりといふとも、是には過ぐまじきと見えしとて、其の場に有り合はせし人々、年を経て後までも語り出して、涙落さぬはなし。此の事起りし始に、翁、彼が父の許に文やりてしらするとて、九十郎たとひ切腹するに及びたりとも、此の程のおとなしさにては、未練なる事あるまじ。それは心安く思ふべし」といひつかはしけるに、後にきけば、父そのふみを人にみせて、かくはいひて來れども、わらはへに灸するに、前には人にすかされて、思の外におとなしく見ゆれども、火を取りて向へば、そのきはになりて俄かに泣き出して、前の言葉には似ぬものぞかし。わが子も未だ年にたらねば、潔く切腹し

(九)揚子法言に曰く「石齋石建、父子之美也。無是父、無是子、無是父。」

たりといふたよりをきくまでは、心もとなく思ひ侍る」といひしとて、古人のいふ如く、「此の父なくば此の子あらじ」となん思ひ侍りし。さて此の事を今申し出し侍るは、九十郎がかくばかり歳にも似ずしてけなげなるを世にきく傳ふる人もなくて果てなんは、あまり不便に候へば、申す事にて侍る。その上、今翁を始め、言論文字にて古人のまねをして、その實の顯るゝ時に至りて、日頃のあらましとちがひありなんは、是ぞ誠にわらはへの灸なるべき。多年學問して儒者といはるゝ身に、かの童蒙無智の九十郎が覺悟にさへ劣るべき事かは。いとほづかしき心ならずや。諸君も常にこゝを察して、よくよく省みたまふべし。



五 忠厚の心

士は第一忠厚の心を本とすべし。その人と爲り輕薄にしては材の美ありといへど、みるにたらず。それにつきて、翁、日頃樂毅が傳をよみて思へらく、毅は戰國の士にあらず。學問ありて、道のあらましをきく人なり。然るに後世、毅が將略あるをしりて、學問あるをしらず。樂毅、燕の昭王に仕へ、上將として齊を伐ちて、七十餘城を下せしは非常の大功なり。不幸にして師未だ凱旋せざりし先に昭王薨じ、惠王、齊の反間を信じて、將をかへ兵權を奪ひしかば、毅自ら成るに垂んとする大功をすて、すみやかに燕を去る。見幾而作、不俟終日といふに近し。其の後、身を趙によせし時、趙王、燕を伐たん事を毅

(一) 易經の繫辭傳に曰く「君子見幾而作、不俟終日」

(二) 「報燕惠王書」は續文章軌範卷六に史記より取りて載せたり

に謀りけるに、固辭して其の謀に預らず。誠に忠臣の法とすべし。その惠王に報ずる書をみるに、忠厚の心、言外に藹然たり。戰國反覆の世には、空谷の跫音と申し侍るべし。其の書中に「君子交絶不出、惡聲忠臣去國不潔其名」といへるは、三代の遺音なるべし。もし學問なくしては、誰か其の言の旨きことをしらん。今其の意を解き侍るべし。交絶不出、惡聲とは、譬へば人と交りて、其の人の惡事をいはぬは、固よりの事なり。其の人と中たがひては、己が是をいはんとて、其の人の非をいふべきに、交絶えて後に、其の人のあしき事を一向に言に出さぬは、君子の忠厚人に負かざる心なり。翁その意を詠じ侍るとして、

ならばじな兒の手がしはのふたおもて



(一)程頤を世に伊川先生と稱せり

(三)塵糟破裏は龔鯤の意の俗語なり叔孫通はもと秦の博士なりしが漢に降りて禮樂を修め朝儀を起し諸制を定む

(四)洛黨は程頤を以て首と爲し蜀黨は蘇軾を以て首と爲す

身は葛の葉のうらみありとも

今更翁づれが申すも愚かなれども、伊川先生に感服する事あり。蘇東坡、伊川をそねみ惡みて、哲宗に上る奏狀に、程頤が姦と稱し、又衆中にて嘲りて、塵糟破裏の叔孫通などといひしが、伊川終に東坡が是非を一言のたまひし事をきかず。是にて知るべし。洛蜀の二黨いづれか正なる、いづれか邪なる、いはずして明らかなり。又刑恕はじめは伊川に従ひて學びしが、後に小人に黨し、伊川を讒して陪陵に謫せしむ。門人聞きて伊川に告げしに、伊川のたまひけるは、故人かねて情厚し。われ少しも疑ふ心なし」とて、聊か不平の辭色なかりき。是等の事誠に吾が徒の師法とすべし。忠臣去國不潔其名といふも、忠厚の事なり。是は人臣たるもの、君と義絶えて其の國

(五)長湫は尾張の愛知郡にあり天正十二年徳川家康豊臣秀吉の軍を敗りし所  
(六)池田信輝創髮して勝入と號す長湫の戦に敗死す  
(七)大阪城に據りて徳川氏に反抗せし人

を去らんに、あながちに君の非をいふにもあらねど、己が誤らぬ事をいうて、一分の上を潔うせんとすれば、君のあしきになるゆゑ、わが名をにこらし、自らわがあしきやうにしてをるとなり。これ忠臣の心なり。翁加賀にありし時、ひとりの老人あり、其の父太陽寺左平次といひし者、長湫の戦に池田勝入の手にて戦功あり。其の後天下泰平になりて、大阪籠城の輩をさへ、御仁政にて諸侯の國に仕ふる事を御ゆるしありし程に、戦功ありし士ども、己が手にあひし事をいひたてて、仕をもとめしに、左平次一生己が長湫にての戦功をいはず。さて親しきものに、大將の敗亡したるに、其の手に屬したる者、己が戦功をいふべきにあらず」といひしと語りき。己が戦功をいへば、總勢の敗軍をば大將の越度にし、一分のいひ



わけして、のくにて侍る。左平次そこをおもふにこそ、古人忠厚の餘味あれ。いとやさしき事なり。其の戦功をいふは、はるかに劣り侍りぬべし。

### 六 武運の稽古

或時わかき人々、武藝の場より歸るさに、翁の庵に来て、例の文談に及べり。翁いふやう、武藝はおのくの家の業といふべければ、常に稽古あるべき事なり。但し武藝と武運といづれか重き事と思ひ給へる。翁は武藝より武運は重き事と思ひ侍る。其の故はいかに武藝に達したる人なりとも、武運つきなば何の詮かあるべき。長湫の合戦に、森武藏守は打物取つて鬼武藏といはれけれども、かけ出づるとひとしく銃丸に

(一)森長一

中りて、即時に果てぬれば、武藝も武勇も用ふべき様なく侍る。然れば武運ありての武藝ならずや、各武藝の稽古あらば、先づ武運の稽古し給へかし。さて武藝の稽古は、それらの師に問ひ給はゞ、委しかるべし。武運の稽古においては、藝術の師の知る事にては侍らず。それは翁などこそと語り残しけるに、座中ひとり、翁の仰事には候へども、武運の稽古と申す事こそうけられ候はね。昔より人力の及ばぬ事なればこそ、武運とは申しつれ。もし稽古にて及ぶ事ならば、誰か稽古せざるべきといへば、翁頭うち振りて、いや武運に稽古こそ侍れ。さらば承らんといへば、翁各思案して見給へ。運はいづくより出づる事にて侍る。天より出づるにあらずや。されば世話にも、運は天にありと申し候。とかく運をば天に禱るよ



り外はなかるべし。天の心に叶はんとすれば、天の好める事は何事ぞ、惡める事は何事ぞと尋ぬべし。翁熟、天の好惡を案じ見るに、天は仁を好みて、甚だ不仁を惡む。信を好みて、甚だ不信を惡む。其のいはれをいふに、天はたゞ萬物を生ずるを心とする故に、古より今に至るまで、年々人物を生じ、生じて止む事なし。秋冬肅殺の氣行はるといへど、果して肅殺するには非ず。生氣を固うして根へ歸せしめ、春を待ち得て、又發生せんとなり。易に『生々之謂易』といひ、『天地之大德曰生』といへるは、此の事なり。天にありて物を生ずるは、人に在りては人を愛するなり。各、是をもて見給はゞ、天の仁を好みて不仁を惡むといふ事疑なかるべし。又信を好む事をいはゞ、日月星辰の行度、萬古を經ても一日の如し。日月の食を見たまへ。

（二四）易經  
繫辭傳に見ゆ

遙かに大空の外なる事を、こゝもとにて推歩するに、分秒までも差はず。これに過ぎたる確かなる事あるべきや。天下の至信といふべし。然れば人は、外の事は暫くさしおきたゞ仁にして信にだにあらば、おのづから天心に叶ふべし。天心に叶はゞ、なか擁護なかるべき。さりとして暫く仁を行ひ、假に信を守りて、其の驗あるべきにはあらず。是は平生にある事なり。常に仁を好みて人を害はず。常に信を篤うして人を欺かず。かくしつゝ、歲月を積みなば、其の誠天に應へて、圖らざるに自然の冥助もありなん。されば、戰場にても、自ら禍機に觸れず、矢石にもあたらざるべし。翁が武運の稽古といふは、これを申すにてこそ侍れ。老人の僻言と聞き給ふべからず。たゞ嘆かしきは、世俗の有様なり。専らに身を利して人を



(四)この殿は  
うへも富みけ  
りさき草の三  
つ葉四つ葉に  
殿づくりせり  
(催馬樂歌)

そねみ、偏に智を恃みて詐を飾る。自ら是を世を渡るよき計  
とこそ思ふらめど、終には天に見捨てられぬべし。人として  
天に見捨てられなば、いかでかよき事のあるべき。翁若き時  
より、世に時めく士大夫の邸宅を過ぎて見るに、三つ葉四つ  
葉に作り並べたるに、歳々に諸寺諸山より捧げ進めける武  
運長久といふ牌を門に釘たせぬはなし。然るに其の家或は  
刑戮せられ、或は子孫斷絶して、武運長久の牌は其のまゝ門  
にありながら、主うせ家滅びて、跡方もなく成り行くも、數多  
有るにて侍る。又それほどにこそ侍らね。身を辱しめ名を墮  
して、晩節を保たざるもいくばく人ぞ。是等は皆武運の稽古  
なき故にこそと推し量らるれ。日頃稽古なくして、祈禱厭勝  
の力にて、武運を守らんと思ふ事、至つて愚かなりといふべ

(五)論語の八  
佾篇に見ゆる  
語  
(六)陀羅尼は  
消災除厄の祈  
禱經

(七)詩經小雅  
の正月篇の詩  
句にして周末  
の亂離を傷み  
何人に從ひて  
祿を受けんか  
と惑へるを鳥  
の飛び迷へる  
に喩へたるな  
り

(一)史記の伍  
子胥傳に見ゆ

し。孔子も「獲罪於天、無所禱也」とこそそのたまへれ。凡そ神にこ  
び、佛に詣ひて、符章陀羅尼やうの事を信ずる、婦女などのす  
るはいかゞせん、丈夫たる者の有るべき事にはあらず。然る  
に近世士大夫より上つ方、民の師表たる人も、こゝに惑はざ  
るはすくなし。されば左道の民間に行はれて、はてしなきも、  
是誰が過ぞや」とて、翁毛詩の「瞻烏爰止、于誰之屋」といふを打  
吟じて慨歎に及びしが、いかなる心にありけん。

七 天人相勝つ

翁かさねていひけるは、「人衆勝天、天定勝人。是は、伍子胥、吳王  
闔閭をすゝめて楚國に攻め入り、父兄の仇なればとて、舊君  
平王の墓をあばきて尸を戮するを、伍子胥が舊友申包胥、平



王の臣たりしが、あまりの事とて、人して伍子胥にかくいはせけり。古今の名言といふべし。天は必ず人に勝ち、邪は正に敵せず。然れども人衆くして勢盛なれば、人力をもてしばらく天に勝つこともあれど、それは天の未だ定まらざるうち、の事なり。天定まりては人に勝たずといふことなし。但し天は悠久にて自然なるものなれば、人間の約束などの、急に其の驗見ゆるには、似るべからず。然るを、人ちひさき眼をもて天道を窺ふ故に、たゞ目前見る所をもて、善惡の報なき事と見すごしつゝ、君子は善をしても疑あり、小人は惡をしても恐れず。その善惡はかはれども、いづれも天定まりて人に勝つといふ事をしらねばなり。それ顔回が天、盜跖が壽は、天の未だ定まらざるなり。其の後天の定まるを見るに、顔回は、一

簞の食、一瓢の飲、陋巷に窮居せしかども、其の名今に日月と俱に垂れて、千載朽ちずしてあり。盜跖は、徒を聚むること千人、天下に横行せしかども、身死して肉いまだ寒えざるに、名先づほろびて、誰いひ出す者もなし。せめて臭を百世に遺すこそ積惡のしるしともいはめ。是をもて見たまへ。天の顔回到報ずる事、果して薄しとせんか。盜跖に報ずる事、果して厚しとせんか。その上、顔回盜跖の如く善惡の報遅きは、稀なり。其の外世俗を見るに、善惡の報、端的なるもあり、又しばらくおそきもあれども、其の身に及ばぬはなし。近きころ國家、職吏多くして、前後罪にあたるが如し。早くあらはるゝもあり、おそく知るゝもあり、又幸にして一生のがれて、死後にしるるもあり。いかゞして斯くはあるといへば、郡縣の租税、金穀



の出納、年を積みて限なく稠疊する故に、その交互紛糾の間、金銀の出入違ひありても、大かたは知れがたき程に、小人は利欲にさときものなれば、それをよき機會と見て、いろ／＼智を廻らしつゝ、ひそかに官財を私して、妻子をさかやかし、奢侈をきはむれども、その跡見えぬ程は、恬然として自ら計を得たりとす。其の内、あらはれて罪に行はるゝもあれども、それは其の人の才覺たらぬ故なりと、反つて己が智に自慢して、いさゝか懲り戒むる心なし。されど才覺をもてする事の、いつか、たがはぬことやある。一旦はからざるに其の端見えて、糺問におよぶ時にこそ、分釐も勘定に漏るゝことなれば、智も計も施すことなく、その姦利忽ちにあらはれて、さきにしばらくのがるゝと見えしも、末<sup>三</sup>の露もとの雫にて、彼

(二)末の露も  
このしづく  
世の中のおく  
れさきだつた  
めしなるらん  
(新古今集)

も此も終には免るゝは無し。しかれば國家の上にて見るに、大きなる所帯は、かくのごとく事の實否は俄かには知れ難きぞかし。いはんや天は四海國土を偏く覆ひ、幾億萬ともなき人を引受けて、いはゞ莫大の所帯なり。およそ人のする事善となく悪となく、限もなく入りみだるれば、善惡の報、いかでか急にきまるべき。されば前後不同ありて、治定せぬ事のやうに見ゆる程に、小人の險を行うて幸をもとむる事も、あやしむにたらず。しかるに天にも終には勘定のきまる時あり。是を天定まるといふなり。こゝに至りて天の聰明は、天下の名算の人といふとも及ぶまじければ、善惡の報、輕重大小すこしもたがふ事あるべからず。むかしより、もろこし、やまと、ともに世の英雄豪傑、多くは己が武勇智謀に誇りて、天の



三 詩經周頌  
の我將篤に見  
ゆ

いまだ定まらざるを見て、天道は人力をもて自由になるものと思ひつゝ、猛威を逞しうし詐力を恣にして、一旦は志を得るに似たりといへども、ほどなく天定まりぬれば、忽ち天罰あたりて、身うせ家滅ぶる事、古今歴々として、そのためしすくなからず。されば人として天に勝つは、禍の本としるべし。小人は眼前の利を見て、淺はかに之をよろこび、君子は未然の害を鑑みて、ふかく之を懼る。詩にいへらずや、畏天之威于時保之と。誠につねにおそれて保つべき事なり。

### 八 朝顔の花一時

松永某とて、鈴木某が道學の友ありけり。その人朝顔の歌とて語りしが、自らよめる歌にや、又は鈴木氏がよめるにや、と

かく兩人の内にてあるべし。

あさがほの花一ときも干とせ經る

松にかはらぬころともがな

この歌意味ふかきやうに覺え侍る。昔より朝顔をよめる歌おほけれども、大かた朝顔のあだなる事をいひて、秋のあはれをそへ、世のはかなきをしらするを趣向とする外は見えず。白居易が

松樹千年終是朽 槿花一日自爲榮

といふ詩を、公任の朗詠にも取りて風雅とすれども、是も、しひて榮枯をひとつにし、彭殤を齊しうする意にて、俗耳には高きやうに聞ゆれども、いと淺き事になんありける。是等は瞿曇が涎を引き、莊周が噬をなむるに過ぐべからず。今松永

(一) 唐の白居易は樂天  
(二) 藤原公任の編せる和漢朗詠集  
(三) 彭は彭祖にて莊周が長壽者に名づけし假名なり癡は三月以上十年の間に夭折するをいふ



(四)論語の里  
仁篇に見ゆ

氏が松に變らぬ心といへるは、それにてはなかるべし。各、いかゞ思ひ給へる。翁は朝聞道、夕死可矣（朝ニケキ、夕ニスレナリ）といへる意とこそ思ひ侍れ。朝に咲きて日影を待ちてきゆるは、朝顔の天より受けたる性なり。世には千歳を経る松さへあるに、これほどはかなき生を得て、いさゝか己を忘れ外を羨むの心なく、朝な朝ないと快く見事に咲きて、受け得たる性分をつくして枯るゝこそ、花の見する誠なれ。いかであだには見るべき。それは松も同じ事なれど、朝顔のはかなきにて、一入その理しるく見えはへる。されば松の心に干とせなく、あさがほの心に一日なし。たゞ各、己が性分をつくすばかりなり。然るを、松の干とせを榮と見るも、あさがほの一日をはかなしと見るも、たゞ見る人の欲目なり。松と朝顔の心になにかあらん。およ

(五)前段は別  
段の意なるべし

そ無情の物はかくのごとし。人は有情なる故に、萬物の靈とはいへど、反つて私智に妨げられて、いまだ道をきかざる時は、こゝに至ることを得ず。されば人は道を聞くべき事なり。しかれども道を聞くといふは、佛者の頓悟などのやうに、前段の事とは心得へからず。道はもとより事物當然の理なり。匹夫匹婦も、ともに知り、ともに行ふ所なり。たゞ眞に知らねば、實に行はず。それ故に習ひて察せず、行ひて著しからず。身を終ふるまで、是によれども、終に悟入する事なし。今道を聞くといふは、外の事にはあらず。唯此の道理を眞に知り、實に行うて、魚の水に安んじ、鳥の林を樂しむ如く、常に道理をいのちとして、しばらくも離るゝことなく、いきてある限は道にしたがひ、死すれば身も道もこれまでに、ながくやすか



るべし。一日生きては、一日の道をつくして死し、一月生きては、一月の道をつくして死し、一年生きては、一年の道をつくして死す。かくては、たとひ朝に道を聞いて其の夕に死すとも、絲毫の遺念なし。是をもておもんみるに、あさがほの一日の壽といへど、己が受け得しまゝに、残なく十分に咲きて、さて日影を待ち得てきゆれば、何の恨かありなん。松の干とせと修短は大きにかはれども、いづれも天命をつくして自らあきたることは同じかるべし。これを松にかはらぬ心とはいふなり。松永氏もこの心にならまほしきまゝに、朝顔によそへてかくはよみけるならし。翁もその歌にならひて、

天地にうけしまことをそのまゝに

咲きてはしほむあさがほの花

あだなりと見てやはやまぬ朝顔の

さくもしほむも花のまことを

そこなはずむさばらぬをぞ朝顔の

松にかはらぬこゝろとは知る

まことに世話にいふ(六)世話盡に「いぐちのうそも心なくさみ」とあり「兎唇うそぶきの嘯うそぶきも心なくさみ」にて侍る。各、さぞをかしくおぼすらん。たゞ辭をすて、意をとり給へかし。

九 仁は心のいのち

或時例の人々とぶらひ來て、講習しけるが、仁義の説に及べり。中にひとりいひけるは、人は天地の心を得て心とす。天地は萬物を生ずるをもて心とする故に、それを得て心とすれば、人は人を愛するをもて、心の徳とする事勿論なり。よりて

九仁は心のいのち



〔一〕朱子曰  
「仁者心之德、  
猶言潤者水  
之德、燥者火  
之德、愛之理、  
猶言木之根、  
水之源。」

仁は心の徳、愛の理といへり。心の徳とあれば、仁、義、禮、智、諸共に仁にもるゝ事なきほどに、仁は四者を包ねて、義も禮智も、仁によりて立つなり。是は翁の講説にてかねて承りし事にて侍る。但し仁は人を愛する心にあらずや。それを衆善の長とする事、誰も知りたるやうに候へども、大かたは人はたゞ慈悲を第一とするをもて、仁を衆善の長とすとばかり心得はべる。それは慈悲の重き事をいはず、しか云ひてもやみなまし。今仁を心の徳とするは、さやうの一通りの浅き事にてはあるまじく候。いかなれば慈悲の心ひとつが心の徳となりて、義も禮も智も、仁なければ、うせほろぶるにやあらんと、工夫すべき事にて侍る。この所を今少し承りたくこそ候へ。翁聞きて、只今申さるゝ所少しも違ひなく聞え侍る。されば

日頃申したる外に、改めて申すべき事もなく候へども、猶更くはしく申し候はゞ、心の仁あるは、人の元氣あるが如し。人の元氣は脈に顯れ、心の元氣は愛に顯る。脈のかよひ絶ゆれば、人死する如く、愛の理亡ぶれば、心死する程に、仁は心の命とも申すべし。それ心は活物なるにより、人情あり、物のあはれをしりて、常にいきたる物ぞかし。よりて父母を見ては、自然に親愛し、親愛せざるに忍びず。君長をみては、自然に尊敬し、尊敬せざるに忍びず。齒徳を見ては、自然に遜讓し、遜讓せざるに忍びず。義を聞きては、必ず感ずる事をしり、不義を聞きては、必ず耻づる事をしる。もし情なく、あはれをしらずば、其の心頑然として鬼畜木石の如く、痛さ痒さもしらずなりなん。何をもて親愛し、何をもて恭敬せん。義を聞きて感ずる



(二)上野佐野の城主佐野修理大夫創髮して天徳寺了伯と號す

事なく、不義を聞きても恥づる事なかるべし。是をもていふに、仁・義・禮・智いづれも心の徳にして、各其の理分るれども、其の本源は仁に外ならず。人として不仁なれば、義も禮も智も、其の様あり其の用ありといへど、所詮内より生ぜねば、眞の徳にあらず、公の理にあらず。この故に、仁に心の徳といひて、外に徳をいはず。仁に愛の理といひて、外に理をいはず。其のいはざる所に深き意ありとしるべし。それにつきて一つの物語こそ候へ。相州北條の幕下、佐野の城主天徳寺、豪健の勇將なりしが、或時琵琶法師を招きて、平家を語らせて聞きけるに、未だ語らぬ先に琵琶法師にいひけるは、「某は唯あはれるなる事をきゝたくこそあれ。其の意して語り候へ」といへば、法師「心得候」とて、佐々木四郎高綱が宇治川の先陣を語りけ

(四)平家物語卷十一に扇的の事あり

るに、天徳寺あはれがりて、雨雫と泣きけり。さて「今一曲前の如くあはれなる事をきゝたし」といへば、那須與市宗高が扇的の語りをけるに、平家半ばより天徳寺また落涙敷行に及びり。後日に家臣の輩に「過ぎし日の平家はいかゞきゝつる」といふに、家臣ども「尤もおもしろき事にて候。但し我等ども一つ心得ぬ事こそ候へ。前後二曲ともに、勇烈なる事にて、哀なるかたは、すこしも候はぬに、君には御感涙に咽ばれて候。是はいかゞの事にて候にや。今に不審なる事に、いづれも申しあひ候」といへば、天徳寺おどろきて「只今まではおのゝを頼もしく思ひ候ひしが、今の一言にて、さて、力を落して候。先づ佐々木が先陣をよく合點して見られ候へ。頼朝、舍弟の蒲冠者にも賜はらず、寵臣の梶原にも賜はらぬ生倅を、

(五)梶原景時の子景季

九仁は心のいのち



高綱に賜へるにあらずや。されば其の効もなく、此の馬にて宇治川を先陣せずして、人に先をこされなば、必ず討死して再びかへるまじと、頼朝にいとま乞して出でける、其の志を察して見られよ。あはれならぬ事かは」とて屢涙を拭ひつゝ、しばしありていひけるは、「また那須、與市も大勢の中より選ばれて、たゞ一騎陣頭に出でしより、馬を海中に乗り入れて的にむかふに至るまで、源平兩家鳴をしづめて是を見物するにも、もし射損じなば、味方の名折たるべし。馬上にて腹かき切つて海に入らんと覺悟したる心を察してみられ候へ。武士の道ほどあはれなるものは候はず。某は毎に戰に臨みては、高綱宗高が心にて槍を取り候ゆる、右の平家を聞く時も、兩人の心を思ひやりて、落涙にたへざりき。然るにおのゝ

(六)孟子の公孫丑上篇に曰く「惻隱之心、仁之端也」

にはあはれになかりしと申さるゝにつけて思ふに、おののゝ武邊は、たゞ一旦の勇氣に任せて、眞實より出づるにてはなきやと思はれ候。それにては頼もしからずこそ候へ」と云ひしかば、諸臣皆迷惑して辭なかりしとなり。是、天徳寺が武邊は涙より出づれば、元より仁者にはあらねど、武の一筋は、仁に根ざして惻隱さくおんの心より發するにあらずや。然るに武は殺獲の事にて、手荒き道なれば、いはゞ、仁とは黑白のたがひあるやうなれども、仁より出でざるは眞の武にあらず。況や其の餘の事は、なほもてしるべし。されば忠孝も禮義も、文道も武道も、内より油然として潤ひわたりて發するにあらざれば眞のものにあらず。是則ち前にいひし、人に情あり物のあはれを知るの心なり。すべてもろくの言行ともに、義



理に當りては悉く忍びざるの心より出で、天徳寺が涙をこぼすやうにだにあらば、是、心徳の全きなり。仁者といはんは何の疑かあるべき。」

### 一〇 杉田壹岐

(一)徳川幕府治下の人なれば特に諡號を用ひて東照宮の上意といへるなり公曰く「主君の惡事あるを見て其の怒をもかへりみず諫言を納るゝ家老は戰場にて一番槍をするよりも遙かにまさりたる心ばせといふべく斯の如きは世に

陣を陥れ先登するは、難きやうにて易く、顔を犯し直言するは、易きやうにて難し。しかるに古今君も臣も、陣を陥れ先登するの功を貴ぶ事をばしれども、顔を犯し直言するの忠を重んずる事をばしらず。されば君たり臣たる人、いづれも東照宮の上意をわするまじきことなり。越前故伊豫守殿の家老に、杉田壹岐といふ者あり。元は足輕なりしが、その身の材をもて、微賤より登庸せられ、厚祿をうけ國老に列しけり。伊

有りがたき忠臣といふべし」  
(二)家康の孫にして秀康の子なる越前侯忠直

豫守殿參勤にて、一年在江戸の内、費用過分なりしを、常に前年より支度して、用度足るやうにしけるは、偏に壹岐が功なりしとかや。それはさる事にて、常に顔を犯し直言して、君の過を匡救する事を忘れず。或時伊豫守殿在國にて鷹狩し、晡時に及んで歸城あり。家老共いづれも出で迎へしに、伊豫守殿殊の外氣色よろしく、家老どもに對して、「今日若者どものはたらき、いつに勝れて見えし。あれにては萬一の事もありて出陣するも、上の御用にも立つべしと覺ゆるぞかし。其の方共も承りて、いづれもよろこび候へ」とありしかば、家老どもいづれも、「御家の爲、何よりめでたき御事にて候」といひしに、壹岐一人末座にありけるが、黙々として居たりしを、何とぞいふかと、しばらく見あはせられしが、こらへかねられ、「壹



岐は何と思ふ」とありしに、其の時壹岐「只今の御意承り候に、はゞかりながら歎かしき御事に存じ候。當時士共、御鷹野などの御供に出で候とは、さきにて御手討になり候はんもはかり難く候とて、妻子と暇乞して立ちわかれ候と承り候。かやうに上を疎み候うて、思ひつき奉らず候うては、萬一の時御用に立つべしとは存ぜず候。それを御存知なく頼もしく思し召さるゝとの御意こそ、おろかなる御事にて候へ」といひしかば、伊豫守殿大きに氣色損じければ、何がしとかやいひし者、伊豫守殿の刀もちて側に居たりしが、壹岐に「座を立ち候へ」といひしを、壹岐聞きて、其の人をはたと睨み、「いづれもは、御鷹野の御供して、猪猿を逐うてかけ廻るを御奉公とす。此の壹岐が奉公はさにてはなし。いらざる事申し候な」

(三) 鳩巢逸話  
に伊藤玄蕃と  
あり

とて、そのまゝ脇指を抜いて後へなげすて、伊豫守殿の側へ進みより、「たゞ御手討にあそばされ下され候へ。空しくなから候うて、御運のおとろへさせ給ふを見候はんよりは、只今御手にかゝり候はゞ、せめて御恩を報じ奉る志のしるしと存じ候はん」といひて、頸をのへ平伏しけるを見給ひて、何ともいはで奥へ入られけり。其の跡にて、外の家老ども壹岐に向ひて、「御爲を思ひて申されしは、尤もにて候へども、折もあるべき事にて候。今日御鷹野より御機嫌にて御歸りありしに、御氣さきを折られ候事は遠慮もあるべき事にこそ」と云ひしを、壹岐君へ諫を申し上げ候に、御機嫌を考へ候うては、よき折とてはなきものにて候。今日はよき序とこそ存じ候へ。其のうへ某事は御取立の者にて候へば、おのゝとは



わけの違ひたる者にて候。御手討にあひ候うても其の分の事にて候といひければ、諸家老各、感じあひけり。さて家に歸りつゝ切腹の用意して君命の下るを待ちけるが、日頃糟糠の妻のありけるに向ひて、そこに言ひ置く事たゞ一つ侍り。御身は女の身なれば、直ちに御恩をうけたるにてはなけれども、われ御厚恩を荷ふ故に、足輕の妻といはれし身が、今歴々の妻として、大勢の所從に圍繞せられしは、かぎりなき御恩にあらずや。然れば、われ生害仰せ付けらるゝ跡にても、たゞ朝夕今まで御恩の有りがたかりし事を忘れずして、かりにも上を怨み奉る心あるべからず。もし女心にて、我が身の物うきにつけて、上を怨み奉るやうなる事を、言葉の末にも露おきなば、黄泉の下までも深く怨と思ふべしとぞいひける。

さて今やと待ちけるを、夜ふくる程に人來て門を叩きしが、「召あるまゝ登城すべし」となり。さてこそと思ひ登城しけるに、すぐに寢所へめし入れて、其の方が晝いひし事心にかゝりて、寝ねられぬ間、夜陰なれども呼びつるなり。わがあやまりたる事は、とかくいふに及ばず。其の方が心ざしを深く感じ思うて満足すとのことにて、直ちに腰の物を賜はりしかば、壹岐も思ひ寄らぬ事にて、覺えず落涙に咽びつゝ拜賜して、罷り出でけりとぞ。此の事、翁加賀にありし時、越前の人ありて語りしが、今おもへば此の杉田などこそ、東照宮の仰せられし世に有りがたき家老といふべし。誠に一番槍よりも難き事にあらんかし。



### 一一 士の節義

或時の會に、古今節義の事に及びけるに、翁いひけるは、孔子季路・冉有の二子を「父」と君とを弑するには「從はず」と仰せられて候。少し志ある際の人の、君父を弑するに同意する事あるべきや。二子は孔門の高弟にあらずや。それにかく仰せらるゝ事、たゞ季氏(三)が不臣を戒め給ふといふばかりにはあらず。是はいはれある事にて候。只今刀を取つて君父を殺す者ありて、「我に同意せよ」といはんには、誰か從ひ申すべきにて候。然るに時移り勢變じて、君父たる人を殺しても、其の跡顯れず、人もさして尤めぬ様に成り行く時は、己が利害にひかれて、覺悟を失ふものにて候。揚雄は王莽が平帝を弑せしに

(一) 論語の先進篇に見ゆ二子は孔門十哲の中に數へらる二子の評は孔子が季氏の問に答へられし言なり  
(二) 季氏は魯の三桓の一

(三) 蕭衍もと齊に仕へ位を篡ひて國を梁と號す武帝是なり

(四) 明の建文帝の時叔父燕王異志をいだき京城を陥れて位に即く是を靖難の亂といふ

仕へて、反つて莽が功德を頌し、沈約は蕭衍をすゝめて、和帝を弑し、その謀臣となる。さては明の靖難(四)の時にて見給へ。燕王は建文帝を殺せしかども、在朝の名臣、寒義、夏原吉、楊溥、楊榮を始とし、孰れも燕王を奉じて、之に臣とし仕へざるはなし。其の外歴代不學無識の徒は論ずるに足らず。是等は皆一代の文儒として、世に名を顯す人ぞかし。是にて知るべし、季路・冉有を「父」と君とを弑するには「從はず」と宣ふは、二子大義に於ては、見ることに明らかにして、確かに覺悟の違はぬ所を聖人見届け給ひてかく宣ひける事を、實に容易の事とはいふべからず。我が朝にても、源義朝が父爲義を殺すにて見給へ。其の身も大惡としらぬにては無けれども、君命は重し。父ながら朝敵となりたる人なれば、是を救ふこと叶ひがたし。



(五)神皇正統記六卷神代に起りて後村上天皇の御即位に至る此の論は卷五二條天皇の條の中に見ゆ

それに鎌田正清などいふ無慙の輩、いろく拵へていひけるまゝ、あへなく之を殺してけり。彼の二子がかやうの場に至りては、たとひ身命を果しても覺悟を違ふる事あるまじきなり。義朝さしも源家の名將と聞ゆれども、勇氣ばかりにて、義理に暗く志節なき故に、是ほどの理非にまよひたり。いかゞして長田忠宗が己を殺すをとがむべき。但し此の事は北畠親房の神皇正統記の論正しうして、最も理に當れり。此の事の斷案ともいふべし。正統記にいへるは「義朝父の首をさらせたりし事、大きなるとがなり。古今にもきかず、倭漢にも例なし。勳功の賞に申し替ふるとも、自ら退くとも、などか父を申し助くる道なかるべき。名行かけはてにければ、いかでか終に其の身をまたくすべき。程なく滅びぬる事は天理

(六)衛の石碯その子厚が衛の公子州吁の亂に興したるを以て之を殺す

なり。凡そかゝる事は、其の身のとがはさる事にて、朝家の御誤なり。よく朝議あるべかりけるに、その比名臣もあまたありしが、なか諫め申さざりける。大義には親を滅すといふ事のあるは、石碯といふ人、其の子を殺したる事なり。不忠の子を殺すは理なり。父不忠なりとも、子として殺すの道理なし。保元平治よりこのかた天下亂れて、武威さかりに、王位かろくなりぬ。未だ太平の世にかへらざるは、名行のやぶれぞかし」とぞ。此の時代、是程正しき議論あるをきかず。さすが親房、南朝の耆老として、此の見識ある程に、此の議論もあるぞかし。近き頃明智光秀が、織田信長を弑せんとて、丹波路より引返す時、途中にて旗下の將士へ、隱謀の企ある事を初めていひきかせ、さて一黨同心せんといふ一紙の誓文を出しける



(七)齋藤内藏  
介利光山崎の  
殿に捕へられ  
て光秀の屍と  
同じく京都の  
栗田口に磔せ  
らる

(八)孟子の離  
婁下篇に見ゆ

に、軍士互に驚き視て、とかうの事に及ばざりしに、齋藤内藏  
介申しけるは、『此の御企千に一つも御利運あるべき事にて  
候はゞ、同意致すまじく候へども、御敗亡は見えたる事にて  
候。それに只今辭退いたし候はゞ、命を惜しみて其の場を外  
し申すにて候。それは士の義に非ず』とて、一番に血判しけれ  
ば、のこりの人々も一言に及ばず、皆同じけるとなり。孟子に  
『非義之義、大人弗爲』といへり。内藏介が義は、大人のせざる所  
なり。この時光秀をつよく諫めてきかれず、光秀の手にかゝ  
り死なんは、中々まさるべし。萬一、光秀本望を達し、永く世に  
あらば、内藏介いきてをるべきや。いきてをらば前にいひた  
る事は偽りなり。よしまた其の時自殺するにもせよ、賊黨の  
名はのがれ得ず。世話にいはゆる『犬死』といふべし。畢竟義理

の筋に暗き故に、小節に拘り、時勢に逼られて、つひに賊黨に  
陥り、極罪に處せられけるは、なげかしき事ならずや。

一二 手折りし枝に吹く春風

日かず經て繼いで講會ありしに、講はて、翁前日節義の事  
を語り候ひしが、跡にておもひ候へば、いまだ申し残して候。  
前日申しつる事どもにて考へて見給へ。盛衰榮枯は世の常  
なり。それによりて志をかへぬは、是又士の常なり。もし時の  
模様につきて覺悟を變じ、世話にいふ<sup>こ</sup>えりもとにつくやう  
にては、何をもて士と申し侍るべき。

水邊楊柳綠煙絲 立馬煩君折一枝  
唯有春風最相惜 慇懃更向手中吹

(一)富貴權勢  
に附く意

二三 手折りし枝に吹く春風



これ唐の楊巨源が楊柳の詩なり。此の三四の句意婉にして  
おもしろく覚え侍る。よりにて其の意を翁がよめる歌に、

なれてふく名残やをしき青柳の

手折りし枝をしたふ春かせ

(一)源平盛衰  
記四十八卷は  
平家繁昌の事  
に始まりて女  
院六道廻り物  
語に至る  
(二)東鑑五十  
二卷は高倉天  
皇治承四年頼  
朝伊豆に起り  
しに始まり頼  
家實朝藤原頼  
經藤原頼嗣を  
經て宗尊親王  
に至るまで鎌  
倉將軍六代の  
間の事を記す

楊柳の人に折られて、はや木を離れたりとて、春風の、それを  
よそにして吹きなば、いかに情なかるべきを、なほ其の手折  
りし手を去りやらで、をしみかほに吹くこそ、いとやさしく  
覚え侍る。古より忠臣義士の、盛衰存亡をもて心をかへぬに  
たとへつべく候。翁、むかし源平盛衰記をよみて、源氏の士に  
は渡部灌口競、平家の士には彌平兵衛宗清が事を感じしが、  
又東鑑にて伊東九郎祐清が事を見て感じけるまゝ、三烈士  
の傳を撰び置きしが、いまだ稿を脱せざるうちに、池魚の災

にかゝり、其の後ふたゝび草を起すこともなく、打過ぎし程  
に、今は其の文をば跡もなく忘れ侍る。渡部競は、源三位入道  
頼政が所従の士には第一のものなり。然るに治承年中、頼政、  
高倉宮をすゝめて兵を起せし時、京師を急に發して、倉皇と  
して三井寺へ赴きしが、打忘れてやありけん、競に斯くと知  
らせざりし程に、競しばらく猶豫して家にありしを、平宗盛  
聞きて、日ごろ競が魁偉なるを見て、己が所従にせまほしく  
思ひしが、頼政が親臣なれば請ふべきやうもなかりしに、こ  
のたび競ひとり都に残りしと聞きて、『六波羅に參れ』と人し  
ていはせければ、參りけり。宗盛對面して、『汝今より我につか  
へば、入道の恩にはまさるべし』とて、小槽毛といふ馬に具鞍  
おき、乗替の料として遠山といふ馬を引きそへ、黒糸をどしの

二 手折りし枝に吹く春風



(四)時の權門  
勢家に附隨せ  
よの意

鎧かぶとまで皆具してたびけり。競かしこまり賜はりて、ほくそ笑ひして罷り歸りぬ。一族家人打寄りて、「入道殿、是程の大事を思ひ立ち給ふに、ひとり取殘されしは、眞實に遺恨なり。大將の斯くうちたへ語らひ給ふは、いなみがたし。」時の花をかざしにせよ」といふ事もあれば、たゞ此のまゝにてあれかし」といふを、競いやとよ、勇士の義さはあらず」とて、宗盛よりたびける鎧着て、小槽毛に乗り、郎等七騎打連れて、三井寺へとて打出でしが、六波羅の門前を通りし時、馬にのりながら、門の内へのぞきつゝ、高聲にいひ入れけるは、「競こそ只今下し賜はりし馬にのり、三井寺へ罷り越し候へ。御眷顧を蒙り候へども、三位入道の恩忘れ難く候へば、このたび死をとものに致すにて候。御門前をむなしく打過ぎんは、ほいなく候

(五)六波羅は  
京都の東山に  
て宗盛等の邸  
第ある所

へば、御いとまを申し候」とて三井寺にいたり、頼政と一所になりしが、其の後宇治橋の合戦に、いさぎよく討死してけり。彌平兵衛宗清は、平頼盛の士なり。平治の亂に、頼朝幼少にて頼盛の家に囚はれしを、頼盛の母老尼、清盛に乞ひて死を救ひけり。其の時宗清、頼朝を朝夕にいたはりしが、平家西國へ落ちし時、頼朝かねて頼盛に通問して疎意なきよしをいはせける程に、頼盛ひとり一門に叛きて都にとゞまりける。其の後平家いまだ亡びずして西海にありし時、頼朝舊恩を謝せんために、頼盛を鎌倉に招きしが、宗清をも必ず召し具せらるべき由をいひおこされければ、頼盛關東に赴くとて、宗清に「いざ、つれて下らん」といひしに、宗清いひけるは、「頼朝、某に下れと候は、定めて昔のなじみを思ひ出でて、所領引出物



などして、そのかみ扶助せし勞を報ぜんとの事にてあるべく候。今更源氏に詔ひて、其の蔭により候はんは、西海にある朋友どもの承る所も、口惜しうこそ候へ。君はかくて都に御安堵しおはしまし候へども、御一門はいづれも西海に流落し給ひ、日夜安き御心もあるまじく候。こゝにて思ひやり奉るも、痛はしくこそ候へ。鎌倉に御越し候うて、賴朝、某が事を尋ねられ候はゞ、折ふしむな勞ることある由を仰せられて給はり候へ」とて、鎌倉へは行かざりけり。其の後西海へ下りけるにや、其の終を知らず。伊東祐清は、伊東祐親が第二子なり。賴朝伊豆に流謫の時、祐親に依りておはせしが、祐親禁衛の役に當りて京師に赴きし間に、祐親が女と通じて一男を産す。祐親満期に至りて京師より歸りし後、是を聞きて大いに怒

(六)石橋山は  
相模の小田原  
町附近にあり

りつゝ、其の男兒を殺しけり。賴朝をも害せんとするを、祐清かなしみ、賴朝をふかく愛護し、ひそかにのがれ去らしむ。其の後賴朝兵を起して、伊豆より相模へ赴きし時、祐親平家の味方として、大庭景親等と石橋山いさにいたりて、賴朝を追ひ襲ひけり。其の後賴朝すでに東國を平定し、自ら大兵を率ゐて駿河に至られし時、祐親を生捕りて至りしを、其罪を決するまで、祐親をば祐親が婿三浦義澄に預けられ、祐清を召し出して、勸賞を行はれんとありしに、祐清たゞ御恩には、はやく殺され候へ。父囚はれ、其の子勸賞せらるゝ法や候。もし我を殺し給はずば、平家に歸すべし」といふに『さればとて、我を救ひし者を殺すべきやうなし』とて、ゆるして放ちやりけり。祐清それよりすぐに京師に奔りて、平家に屬し、後、篠原の合戦



に、つひに討死をとげけり。この三人、時代も大かた同じく、志節も相似たり。その清風高義、源平の間に求むるに、其の類すくなくおぼえ侍る。さて元弘建武の亂に至りて、天下板蕩の間難に死し節に死するの士、限なく相見え候中に、翁かねて安藤左衛門聖秀が事を感じて落涙しける。聖秀は、北條高時が臣なり、新田義貞の妻の爲には伯父なりしかば、鎌倉すでに陥る時、彼の女房、義貞の文に我が文を添へて、ひそかに聖秀がもとへぞつかはしける。聖秀は高時が將として、新田の兵と戦ひしが、郎等大かた討死し、聖秀も薄手あまた負ひて引返しけるが、高時すでに屋形に火をかけて、東勝寺へ落ちけるといへば、御屋形の焼跡には討死のもの多く見ゆるか」と問ひけるに、「一人も見えず」といふを聞きて、「口惜しき事か

(七)東勝寺は北條泰時の創建せし鎌倉の禪寺

ないざ殿ばら。とても死なん命を、御屋形の跡にて心靜かに自害せん」とて、百餘騎を相從へて、屋形の跡へ赴きしが、今朝まで墓をならべて、さしも奇麗なりし大厦高牆、忽ちに灰燼となりぬるを見て、聖秀感慨にたへず、涙をさへ惘然として立てたる所へ、彼の文をもて來りぬ。是を披き見れば、鎌倉の有様、今はさてところ承り候へ。いかにもしてこなたへ御出で候へ。身にかへても申し宥むべし」とあり。聖秀是を見て、大きに色を損じて申しけるは、「われ今まで主恩に浴して人にしらるゝ身が、今事の急なるに臨みて、降人になりて出でなば、豈恥を知りたる者といはんや。されば女性心にて、たとひかやうの事をいはるゝとも、義貞勇士の義を知られば、さる事やあるべきと制せらるべし。又義貞こなたの許否を試み



(八) 似たるを  
友とするとは  
易經の文言傳  
に「同聲相應  
同氣相求」と  
いひ又我が國  
の諺に「似た  
もの夫婦」と  
いふ類の語な  
り

(九) 天正十年

るために、いひこさるゝとも、北の方は我がかたさまの名を失はじと思はれば、かたく是を拒がるべし。只似たるを友とするうたてさよと、一度はうらみ、一度は怒り、彼の使の見る前にて、其の文を刀に拳りかへて、腹かき切つて死にける。嗚呼、聖秀いかなる人ぞや。義氣の勇壯、志操の潔白、是に過ぎたる事やあるべき。さて近代にては、武田勝頼の臣小宮山内膳が節義こそ、最も感嘆するに餘りあれ。内膳は勝頼近習の臣たりしが、天正年中の事にや、内膳人と争訟しける事ありつるに、勝頼讒人の言を用ひて、内膳が不直に決せしかば、内膳罪なくして、ながく逐ひしりぞけらるゝ程に、是非なく家に蟄居して數月を経けるが、織田の兵甲州に亂入して、勝頼敗北せし故府をすて、温井常陸助を先とし、纔か四十二人

の兵と、天目山中に奔るときこえしかば、内膳身をもて急に赴きしが、道にて追ひつけり。さきの内膳と争ひし者並に讒せし者を問ひけるに、いづれもとくに逃げ去りぬといへば、内膳慨然として、かたへの人にいひけるは、「君、我をもちひずして棄て給ふに、今出でて其の難に死せば、君の明を損するに似たり。又死せねば臣の義をやぶる。よし君の明を損すとも、臣の義をば傷らじ」とて、四十二人と同じく國難に殉ひけり。此の難に、甲州の士皆勝頼を叛きて逃げ去りしに、四十二人ばかり傾覆流離の間につきまとひて、いさゝか二心なく國難に殉ひしは、いづれも節義の士と申すべし。中に内膳は讒をもて冤枉にあひしをも怨みず、従者の列にもあらぬ蟄居の身として、外より來りて死に赴きし事、其の忠烈はるか

二手折りし枝に吹く春風



に温井等が上にあるべし。武田滅亡の後、東照宮内膳が忠義を深く感じ給ひ、其の子なくして祭祀の絶ゆるをあはれみ給ひて、内膳が弟小宮山又七郎をめし出されしが、其の後小田原陣の前武職の人を極められしに、又七郎をもて御長柄槍奉行に仰せ付けられける。其の時内膳が勝頼に對して忠義ありし事をくはしく仰せたてられ、誠に武士の手本とおぼしめす。又七郎いまだ弱手なれども、兄内膳が忠義を感じ、思召によりて重き職を命ぜらるゝよし、上意ありけりとぞ。誠に死後のめいばく、忠義の驗と申すべし。

(一〇)めいばくは面目の音便

一三 燈臺もと暗し

三伏の夏も、はや半ば過ぎ行きし比、人々すゞみがてらに駿

臺の庵にとぶらひ來けり。折ふし積雨新に霽れて、夕日梢に残れるに、庭の竹樹露すゞしく、池の芙蓉風かほり、なにとなく見すくしが、たき折からなり。諸客はしゐしつゝ、勾欄によりて、詩歌を朗詠しけるが、はや物のあやめも見えぬばかりに暮れゆけば、やがて内に入りて、翁に「暇申さん」といふを、今しばし」とあれば、さらば宵の間過ぐる程こゝにありて、御物語承らん」とて、各座につきけり。しばらくありて、燭もて至りぬるに、翁ふと思ひよりしまゝ、燭臺をさして、世俗の諺に「燈臺もと暗し」といふは、いかやうの事にたとへていふにやあらん。各、いうて見たまへ」とあれば、座客の中ひとりいひけるは、「世に何事にもあれ、外にはかくれなき事を、其のもとにてきけば、却つて分明ならぬやうの事に、かく申しならし候。

一三 燈臺もと暗し

六七



但し我等が愚見にて、これに道理をつけて申し候はゞ、孟子の『道在邇而求諸遠』といふ意にもたとへば、たとへつべし。人毎に本を忘れて末をつとめ、近きをすて、遠きに求むるは、常の事にて候。是を弓射る者の的にのみ志して、あたりの手前にある事をしらぬにたとへたれば、燈臺のもと暗きにたとへても、同じ心ならんかし。亦ひとり聞きて、されば其の事にて候。羅大經が鶴林玉露に、悟道といふ尼の作とて、

盡日尋春不見春、芒屨踏遍隴頭雲

歸來笑撚梅花嗅、春在枝頭已十分

是も道の近きに在りて、遠きに求むるたとへなり。ひねもす山野に春を尋ね暮して、春はとくに我が宿の梅にある事をしらずといへるも、燈臺もと暗きの意にもよく叶ひて、いと

（一）宋の羅大經鶴林玉露十八卷の終に載せたり

どおもしろくこそ候へ。又ひとり「道の沙汰ばかりにも限らず。外の事にもあるべし。たとへば東晉の時、桓温三秦に討ち入りしに當つて、王猛來見しけるに、『三秦の豪傑、何とて未だ一人もまみえ來らぬ』と問ひしにぞ、桓温が眼の暗きもしられけり。三秦の豪傑、王猛に過ぎたるものやあるべき。眼前に豪傑あるをしらずして、豪傑にむかうて豪傑を問ひしは、燈臺もとくらきにて候はずや。又ひとり「古より倭漢共に英主の遠畧を力むるが、其の威望遠く敵國に及べども、まちかく蕭牆のもとに敵ある事をしらざるも、燈臺もと暗きにたとふべし。近代日本にていはゞ、織田信長、關東關西の諸國まで手をのばし、討ち從へられしかども、手もとに暗うして明智にころされし、燈臺もと暗きにあらずや」といふを、翁きゝて、



(二)古文眞寶  
前集に見ゆ

「すべて比喻の語は義理のとりやうにて、色々に申さるゝ物にて候。此の諺も各、たがひに其の義をつくされしにて、最早此の外はあるまじく覺え侍る。但しおのくの申さるゝは、何れも『燈臺もと暗し』をあしき方にたとへらゝにて候。翁は又此の諺を宜しき方に取りなしてきゝたくこそ侍れ。又一種の道理もあるべきにや。韓退之が短檠の歌に、

長檠八尺空、自長、短檠二尺便、且光。

と作れる如く、燭臺も長きは燭のもと暗く、短きは燭のもとあかるし。夜中に書をよみ、字を寫すやうの事には、手もとを明らかにして、其の用をかなふる故に、短きを貴ぶにて候へども、さりとして一二尺の手燭にては、燭のもとこそあかるくあるべけれ。此の座上にても、くまの暗きを照しぬる事

(三)關尹子九  
篇周の尹喜の  
著といへど後  
世の偽作なり

は難かるべし。まいて稠人廣座をいかゞして照し申すべしや。然れば、もとをあかるくしては、遠きを照し難し。遠きを照すは、必ずもと暗きものとするべし。翁いつの比か、關尹子を見侍りしに、『吾が道は暗きに處るが如し。よく明中の區畫を見る』といへり。關尹子は關令尹喜が書なり。尹喜は老子の弟子にて、道德經五千言も此の人の爲に著せりとなり。今世に傳はる關尹子の書は、大かた後人の作にて、尹喜に名を託したる物にてもあらんかし。されど老子の道は、たしかに暗きに處るを宗とする事にて侍る。但し老子の道にも限るべからず。吾が儒にも簡要とする事なり。たとへば、わが身くらがりにて、くらがりよりあかりを見れば、あかりの事残りなく見ゆるものなり。わが身あかりにて、あかりよりくらがり

二三 燈臺もと暗し



りを見ては、くらがりの事一切見えぬものぞかし。されば、くらがりにゐてあかりをみるやうに、己が智を深くひそめ養ひて、くらきより明らかなるを生ずるやうにすれば、其の明、悠長寛大にて自然に遠きに及びなん。それこそ眞の明といふべけれ。もし己が材智にほこり、聰明をつくして、たゞ手もとの、あかるきを専らにせば、あかりにゐてくらがりを見るが如し。其の明淺近短慮にて、遠きに及ばざるのみならず、唯手もとの事のみ見えて、下手の碁をうつが如し。末の手は見えざる程に、毎々是非を誤る事も多かるべし。こゝをもて、聖人、易（四）において、『明入地中、明夷。君子以蒞衆、用晦而明』とのたまへり。古の聖王、冕旒目を蔽ひ、黈纁耳を塞ぐも、聰明の刃はやきをきらうて、晦きをもちひて養はんとなり。古より倭漢と

（四）易經の下象傳に見ゆ

（五）史記の老子傳に見ゆる語

（六）板倉周防守重宗元和六年父勝重にかはりて所司代となる

（七）兩造とは原告と被告をいふ

（八）この口實といふ意義は語りぐさといふが如し

もに大智遠識の人の、己が材智に傲りて好んで自ら用ふるをきかず。老子の『良賈深藏、若虚。君子盛德、若愚』といへるも、げにさる事ぞかし。近き頃、板倉周防守が京師に留守たりし時、訴訟をきかれしに、己が材智のはやり、聲色のうごきなば、我もそれに氣乗りし、彼もそれに氣奪はれ、兩造の辭を審かにせず、雙方の情をつくさざる事あらんとて、必ず障子をへだて、わざと手づから茶をひきなどしたゞ心のちらぬやうにしてきかれしとなり。さすが近代の名人とはいひながら、おのづから聖人の心にもかなへり。それ故、曲直理を盡くし、聽斷神に通じ、人々畏服せざるはなし。いはゆる『用晦而明』なるに、あらずや。今に至つて世の談者傳へ誦して、口實とする事、枚擧するに違あらず。中にも翁が最も感じ思ふ事あり。



周防守ある時京の在家を通られしに、さる家に幼少の子出で遊びしが、『あれ周防こそ通らるれ』といひしを、周防守馬上にて聞きとがめて、我、不肖といへど、上の御代官としてこゝにあれば、京中・村閭に住する者、男女老弱をいはず、我をかくおしくだしていふ事あるべからず。然るに此の家の兒輩かくいふは、常に家人の我を恨みてかくいふを聞き馴れし故なるべし。是は定めて子細あるべしとて、其の家主の名をきかせて通られしが、翌日其の家主を召しよせて、『汝先年何にても訴訟したる事やある。今尋ぬるは、少しも氣遣ひなる事にてはなし。ありしやうに申すべし』といはれしかば、始は何かと辭退しけるが、再三とはれて、『此の上は隠さず申し上げ候。その年その月の事にて候。父の配分の事に就きて、一

類の者と争ひ候うて訴へ候ひしが、其の者無實の事を申しかけ候へども、證人どもを多くこしらへ候うて申し出で候故、御聽斷の上、相手の勝に定まり候。其の次第かやうく』と委しく語るを、下役人に命じて、其の年にあたりし簿案をくらせけるに、少しもたがひなかりしかば、其の上にて愈、尋ねきはめて、『是はたしかに某が聽き誤りたるなり。いと残念なれども、もはや年久しき事なれば、今更すべきやうなし。其の配分ほどを某償ひて、我が過を謝すべし』とて、自分の金銀を出して、其の者へ取らせられしとぞ。是にて知るべし、周防守己が威勢を募らず、己が過失をかくさず、我は常に晦に處つて明を銜はず、我は常に愚に處つて智を先だてず、其の心公にして私なきを、誠に古今に有り難き明智といふべし。今、是



等をもて此の諺を考ふるに、燭臺は長くして、もとの暗きにて、其の明おのづから遠きに及ぶ。君子の道は闇然として日に明らかなるが如し。もし短うして、もとあかるければ、其の明わづかに近うしてやみぬ。小人の道は的然として日に亡ぶるが如し。此の理を示して、明らかなるものは必ずもとをくらうすといふ心にて、『燈臺もと暗し』といふにもあらんかし。但し、此の諺の正意はおのゝいへる事となるべし。翁がいへるをば、姑く一説にそなへ給へかし。さても根もなき事に、あまりくはしき僉議かな」とて翁微笑しければ、諸客かやうの事にも、翁の心のつけられやうこそ別段の事にて候へ」とて各、感じあへり。

一四 泰時の無欲

他日、繼いで(一)丙吉と魏相の會に、諸客、前日平家の人物をば御評論承りて候。鎌倉以來の人物は多き事にて候へば、普く承るに及ばず。其の中に、翁の取り給へる人は誰々にて候や、承りたく候」といへば、翁、鎌倉治世の後に至つて、北條泰時こそ、漢の(二)姚崇と宋璟の姚宋にもはづかしからぬ人にて候へ。我が國には餘り比類なかるべし。此の人、梅尾の明慧(三)僧高辨明慧と號す京都の北西なる梅尾の山寺に住すにあうて、『某不肖の身をもて重任に當り、群下に臨み侍る。如何して衆を治め争をやめ侍るべき』と問はれしに、明慧、唯無欲になり給へ』といはれしを、泰時重ねて、『某獨り無欲になり候とも、群下何とて無欲になり候べき』といはれけるに、明慧、下に目をつけずして、御身



(四)二位尼は  
頼朝の夫人政  
子

先づ無欲になりて見給へ』といはれしを、泰時深く信じて、父  
義時死去の時、所領財寶、大方諸弟に配分して、其の身は僅か  
に足るばかりとられけるを、二位尼、泰時に、『自分のとられや  
う、あまりすくなき事』といはれしに、『某は家督をうけ候へば  
何の乏しき事もなく候。たゞ弟どもの豊かなるやうにとこ  
そ思ひ候へ』といはれしかば、二位尼も感涙に及ばれしが、其  
の後、年を逐うて親族肅穆し、鎌倉の武臣も感服しけり。明慧  
浮屠なれども、孔子の季康子にのたまひし『苟子之不欲、雖賞  
之不竊』といふに叶へり。泰時が明慧の一言を信用して、鎌倉  
よく治まりしにて、聖人の言誣ふべからざる事をしるべし。  
明慧もたゞうとにはあらざりけらし。さて泰時家督以後、日  
ごとにつとめて公廳へ出で、終日蹇々として、庶務を治めら

(五)論語の顔  
淵篇の語

(六)たいうと  
は徒人の音便

(七)この事無  
住法師の沙石  
集卷三に見ゆ

れしに、群長を待つ事恭謹にして、争を分ち、訟を聽かるゝ事  
明恕なりしこと、東鑑を見てしるべし。昔ある老儒の語るを  
きゝし。泰時、或時訟をきかれしに、雙方對決しけるが、半ばに  
なりて、一方の相手忽ちに理に服して、『只今まで己が申す所  
をよしと思ひて候へばこそ争訟に及び候へども、今日始め  
て手前の非を覺悟致して候。此の上は最早一言申すにも及  
ばず』とてやみぬ。泰時感じて、『この争は汝がまけなり。理非に  
よりて決斷すべし。但し某今まで多くの訟をきゝしかども、  
即座に汝が如く理に服する者を見ず。是を賞せずして何を  
か賞すべき』とて、別に恩賞を行はれしが、後は争訟も漸く稀  
になりて、訟庭も閑になりしとぞ。此の事何やらん古き物語  
にて見しといひしが、忘れにき。其の後考へもし侍らず。此の



(八)最明寺入道時頼は泰時の子の時氏の子なり又時宗は時頼の子なり

一事にても、泰時の公明にして、情無き者は其の辭をつくす事を得ず、又恩威二つながら正しき事もしられたり、其の孫謀のよき、後嗣に及んで、時頼時宗いづれも遺訓を守り、成法に依りて、よく政を勤められしかば、四方の人心鎌倉に歸嚮せざるはなし、北條氏皇朝の陪臣をもて、天下の權を執りて、數代の安きを得たるは、泰時の功といふべし、世に時頼を泰時より賢明なるやうに稱しぬるは、心得がたく思ひ侍る、ただ早く高位を脱履して浮屠に歸し、微行を好み下情を察せられしを、奇特の事とこそいふらめ、それは道理をしらぬ人のいふ事なり、其の身宗廟社稷の重きを承けて、自ら佛寺に逃れ、微行を樂とする事やあるべき、君徳を穢し、治體を失へり、人主の法とすべからず、是にて見れば、其の治、規模近小にして、遠大に昧かりけらし、中々に泰時に及ぶべき人に非ず、其の外鎌倉の人物を考ふるに、上下共にすべて取るに足る人なかるべし、但し建國のはじめ、數多の人材幕下に群集すといへど、血氣勇悍の人までにて、いづれも粗暴無識、みな絳灌<sup>(九)</sup>が下にて候、其の中に畠山重忠は、勇力世に勝れ、古今の壯士といふばかりにてもなく、志操潔白にして、極めて正直の人なり、世に和田と並稱するはその倫に非ず、梶原が讒にあひし時、『誓文をもて陳謝せよ』といひしを、『重忠一生偽をいはねば、今更誓文に及ぶべき様なし』とてうけざりしかども、頼朝も疑を殘さず、梶原も怒を加へず、是にて、もとより忠信の上下に感孚する事をしるべし、其の上、己が善に伐らず、人の功を蔽はず、おのづから寛厚長者の氣象なんありける、當時

(九)漢の絳侯周勃及び灌嬰の二人

(一〇)和田義盛  
(一一)梶原景時

一四 泰時の無欲



(一)三浦泰村

(二)田樂入道は高時の綽名なり太平記卷五に詳なり

諸將の中に求むるに、少しく似たる人もなし。不幸にして三浦と同じく、前後北條が爲に殺さるゝこそ、いと口惜しき事なれ。其の最後も、さすがに他よりは一きは潔く見えしぞかし。こゝに至りて時政義時が惡、天道にさかひ、人望に背く。其の罪誅しても餘りあり。もし泰時なかりせば、北條家の滅びんこと、高時が時を待ち侍らじ。獨り田樂入道(二)をのみ罪すべからず。

一五 武田信繁

(一)左典厩は左馬介の唐名

爰に足利氏の季世、天文永祿の間に至りて、賢と稱すべき人あり。甲州武田信玄の弟、左典厩武田信繁是なり。然るに近代武功をのみ尙びて、徳行をば稱せざる故に、信玄の名は高け

れども、信繁の賢はかくれて世にしる人なし。今翁があらはさずしては、誰かいひ出づる者あらん。信玄の父信虎、信繁を愛して信玄を廢する心あり。それ故信玄父子不和なりしに、群臣何れも信玄の武略に長じたるを見て、信虎をすて、信玄に思ひ附きしかば、信玄群臣と謀りて、信虎をすかし出して、是を拒ぎし程に、信虎甲州へ歸ること叶はず。今川氏眞の外祖父たるによりて、駿河に出奔して、今川家の寄公となりて、年を経けれども、信玄終に父を迎へて國に入るゝことなし。信虎後に京都に流落して一生を終へたり。信繁、信虎の愛子として、信玄を廢して信繁を立てんとするをば、かねて信玄も知りたる事なれば、必ず忌み惡むべし。それに國に残りて信玄に仕ふるは、危難の場なり。父を追ひ出す程の人なれ



(三)東海王疆の事は後漢書光武十王傳に詳なり

(二)資治通鑑卷四十三をさす

(四)永祿四年信繁川中島に戦歿す年三十七

ば、つゆ友愛の心あるべきにもあらず。然るに信繁嫌疑の間  
にゐながら、信玄に仕へて、兄弟の間少しも違言ある事をき  
かず。むかし後漢の東海王疆は光武の太子たりしが、廢せら  
れて諸侯王に下れり。明帝母寵によりて、弟をもて立ちて太  
子となり給ひけるが、其の後明帝の代に至りて、東海王恭謹  
にして、上を奉じ身を全うして終られしをば、前史にも褒稱  
して、記し置きしぞかし。されど、それは明帝孝友なれば仕へ  
易かるべし。信繁はそれとはちがひ、殘忍至極の兄に仕へて  
朝夕國に倦々として、人臣の節を失はず。信玄といへども常  
に親任して疑忌の心なく、始終一の如し。その忠信誠實、人を  
感孚するにあらずして、いかでかくの如くなるべき。さて川  
中島にて討死せられしこそ尤も義にあたりて覺え侍れ。信

(五)史記の范  
睢傳に曰く  
「君辱臣死」  
(六)論語の憲  
問篇に曰く  
「見利思義、  
見危授命」  
(七)甲陽軍鑑  
卷一に「子息  
へ異見九十九  
條の事見ゆ  
(八)盡未來際  
は佛典の語に  
て未來子々孫  
々あらん限の  
意

玄一生の危き折なれば、この時死せずして、いつのために命  
を惜しむべき。されば、主辱めらるれば臣死すの義を守りて、  
こゝろよく討死せられしは、誠に「危きを見て命を授く」とい  
ふべし。其の子を誡められし條子がきの物を見侍るに、一つ  
として恭敬篤實の事にあらざるはなし。其の中一條に「たと  
ひ海は野となり野は海となる」とも、盡未來際、御屋形に對し  
て二心あるべからず」といひ、又一條に「たとひいかやうの御  
懇意にても、後庭へ出入すべからず」といひ、又一條に「諸人同  
座する時、もし好色の語に及ば、目にたゞぬやうにして其  
の座を立つべし」といふにてしりぬ。信繁人がら恭謹なるも  
のから、しかも身を守ること嚴正にて、かりそめにも汚俗に  
同せず。其の高風清節、古人に恥ぢざるべし。又一條に「合戦に



(九)易經繫辭  
下傳に見ゆ

(一〇)天正十  
年勝頼信勝父  
子信長に滅さ  
る

赴く時、敵近くなれば、人數を急にあらくつかふべし」とあり。是にて信繁戰陣に勇ありて、兵をまはすに熟しぬる事をしれり。しかれば勇威武畧さへ兼ね備はりけらし。易にいはいはゆる「知剛知柔萬夫之望」とは、此の人の類をいふべし。嚮に信玄社稷の慮ありて、はやく此の人を立て、世子とし、監國の任にをらしめば、甲州ながく滅びざらまし。しかるに昏昧剛愎の勝頼に傳へしかば、信玄死していくほどなく織田氏のためにほろぼされにきなげかしき事にあらずや。

一六 大敵外に無し

翁かねておもふ事にて候。今の學者、聖賢の書を讀みて、なまじひに義理の僉議をいたし候へども、大かたは僉議に目を

(一)(二)孫子の  
作戰篇に曰  
く「兵聞拙速、  
未觀巧之久  
也」

(三)堀秀治  
(四)堀政直な  
るべし

くらし、何にても一つとりとめて身に得たる事は侍らず。是も「巧にして久しき」と申すべし。然るに武臣たる人は、不學にして一己の見付けたる所によりて覺悟を決して、直ちに行ひ出し候故、端的に其の驗を見せ申すにて候。學術なく候へば、理に當らぬ事もあるべく候へども、其の得たる所、おのづから聖賢の教にもかなひ候。いはゆる「拙にして速なるに候はずや」。翁加賀にありし時、その祖先越後の堀の家に住へしものありて語りしは、越後守の家老に堀監物とて名ある者あり。主人越後守、伏見の邸にて、日暮に客を送り出でけるに、越後守に怨ある者ありしか、かくれ居て、急に斬りかけしを、越後守も抜きあはせしところに、監物はるかろうしよりより一番に來て、彼の者を斬り倒しけるを、左右に供したる士共、

一六 大敵外に無し



もろともに打ちとめけり。後日に右の士共、監物に逢ひて其の日の事をいひ出で、「日暮といひ不慮の事といひ、我等共心ならず少しおくれ候ひしを、御身にははるか後に御渡り候ひつるに、いかなれば一番に手に御あひ候にや、不審なる事にこそ存じ候へ」といへば、「いや、おのゝとて、武邊の某におとるべきにてはなく候へども、某はかねて一つの覺悟ありての事にて候。おのゝは此の覺悟なき故に、某に先をさせらるゝとこそ存じ候へ。此の後も、おのゝは殿の御供を勤めらるゝ事にて候へば、向後御心得にもなるべく候まゝ、今までは人に申さぬ事に候へども、傳授いたし候べし。總じて君の御前に伺候し、御後に供奉し候時は、假にもわきへ目をはなさずして居るを簡要の法といたし候。さ候へば、君の

(五)寛永九年  
永井尙政老中  
となる

動靜針ほどの事も見つけずといふことなし。よりて不慮の事ある時も、我しらず手にあふ事すみやかなるものにて候。この某が一言を必ず忘れ給ふべからず」といひしとなり。是は武の心掛より覺悟したる事にてあるべけれども、聖賢の心にも叶ひ侍るべし。それについてこゝに殊勝なる事こそ候へ。寛永の頃にやあらん、永井<sup>信</sup>濃守尙政しきりに昇進して寵任せられけるが、其の頃井伊掃部頭直孝一代の元老にておはせしに、或時邂逅して、我等事、弱年の身にて特恩を蒙りて重職をつとめ候事、誠に至極と申すべく候。そこもとには御老功の御事にて候へば、我等心得にもなるべき事おぼしめしよりも候はゞ、仰せきかされ候へ」とあれば、掃部頭先づ感じて、「奇特なる御心得にて候へ。いかにも一つ存じより



たる事候まゝ傳授し候へし。されども大切なる事を、あからさまには申し難し。いよく御聞ありたく候はゞ、某が宅へ御越し候へ」といはれしかば、日を定めて禮服を着し、彼の宅へ往かれしに、掃部頭出でて對面の後、世話に「油斷大敵」といふ事、定めて御覺えあるべし。某が傳授外にはなく候。此の一言にて候ぞ。必ず御忘れあるな」といはれしとぞ。むかし周の武王即位のはじめ、太公望を召して、簡約にして、行うて恒とし、萬世に傳ふべき道ありや」と問ひ給ひしかば、太公望まうさく「其の言丹書にあり。王もし聞かんと欲せば、齋戒し給へ」とありしかば、武王齋戒端冕して、東面して立ち給へり。其の時太公望西面して、丹書の言を武王にさづけて曰く「敬勝、怠者、吉、怠勝、敬者、滅、義勝、欲者、從、欲勝、義者、凶」と。今、油斷大敵の語

（五）丹書は箴  
銘の類なり丹  
を以て之を書  
く

鄙諺なれども、丹書の戒に叶へり。しかるに君に仕へ事を務むるに、油斷のあしきとは、誰も知りたる事にて、しかも眞實にしらぬ故に、右の諺をも等閑に聞きすぐして、こゝに心をとゞむる人なし。よりにて毎々油斷して過失を生じ、咎禍を招きて、ともすれば臍を噬むこと多きぞかし。掃部頭は、常に油斷を禁じて身に近づけぬ心から、眞實に此の事の簡要たるをしらるゝ故に、この諺を大切の事として、信濃守にも傳へられしなり。拔群の識あるに非ずしては、いかでかくあるべき。其の上、あからさまにいはれず。前に日を定め、其の人に盛服させて、おもく傳授せられしも、かの太公望の丹書を武王に授けし面影あり。かくあらねば、其の事輕し。其の事輕ければ、其の信深からねば、其の人の益になりがたし。亦誠意懇到



(七) 寬永の頃は家光將軍たり明曆の頃は家綱將軍たり

を見るべし。掃部頭學術のありし沙汰もきかねども、おのづから聖賢の教に候へるこそ、極めて殊勝の事といふべし。すべて寬永明曆の間在廷の諸公の人がらを聞くに、いづれも篤實簡重、寬厚の長者なり。其の政を謀るには、虚文を抑へ事實をつとめ、人を取るには、材辨を退け實行をすゝむ。近世智巧を尙ぶの風より見れば、其の拙きに似たれども、凡百の有司いづれも廉靜寡欲なりしかば、各身を守り職を恭しうして、時勢に附かず身計をなさゞりき。是によりて、庶政あがり百事ひろまり、たゞ此の時を別して盛なりとす。勿論時運の然らしむるとはいひながら、其のいはれなきにあらず。然るに篤實の士は、謹厚にして用にとく、材智の士は、敏捷にして事にさとし。この故に古今人材を用ふるに、多くは徳行を

(八) 諸葛亮字は孔明忠武侯と諡せらる  
(九) 時に蜀魏吳の三國鼎立の勢を爲す

(一〇) 蜀の後主にふりしもの

すて、材智の士を取るぞかし。さし當りよく職を辨じ、しばしば近効をたつる程に、敏速の功ありと見ゆれども、事おほに僉議がちにて、事實常に隠れ、下情常に塞がりぬれば、政弊民瘼も是より起るぞかし。是によりていふに、兵に限らず、治世の政も拙速をよしとして、巧遲を得たりとせず。むかし諸葛武侯の蜀につかふる、出將入相として、内外の任を兼ねしが、高世の材をもて自ら用ひずして、つとめて衆思の益をあつめ、僚佐の諫を求む。自ら至拙の地に處るといふべし。然るに其の魏をうつ、毎戦必ず勝ちしかば、司馬懿畏るゝこと虎のごとし。其の益州を討する、七縱七擒にせしかば、孟獲心服して天威とす。其の神速なる事想ひ見るべし。其の後出師表にいへらずや。劉繇・王朗各據州郡、論安言計、動引聖人、群疑滿

一六 大敵外に無し



腹衆難塞胸。今歲不戰。明年不征。使孫策坐大。遂併江東。と。これ巧遲の害を論ずる事明白なり。但し武侯の度量規模もとより孫武が及ぶ所にあらず。今其の言によりて、孫武が拙速巧久の語、最も軍國の龜鑑として、武侯といへども易ふること能はざるをしるべし。孫武も亦人傑なるかな。

一七 月は世々の形見

今年もはや半ば過ぎぬれば、いつしか秋のけしきたちて、萩吹く風も身にしむ頃なり。久しく翁のかり行かねば、此のほどの老のねざめも覺束なし。いざ尋ね問はん」とて、ある夕暮に例の人々うちつれて來りしが、又も參らんとて歸らんとせしを、翁とゞめて、「今宵は月もよし。薄酒進め奉らん。しひて

とまり給へ」といへば、翁の心をいかでそむくべき。さあらば」とて、おのゝ座をしめて、清談の露やうゝ繁き程に、家人やがて心得て、とりあへぬまでに、あるじまふけし、肴とりそへて盃出しけり。諸客皆興に入るとぞ見えし。其の中に一人盃を停めて、

青天有月來幾時 我今停盃一問之

と、李白が詩を高らかに打吟じけるを、又二人脇よりつけて

人攀明月不可得 月行却與人相隨

と歌ふ。又外の人々迭に唱和して、其の次を

皎如飛鏡臨丹闕 綠煙滅盡清輝發

と歌ふ。又其の次を

但見宵從海上來 寧知曉向雲間沒

(一)此の詩は李白全集卷二十「把酒問月」といふ題にてあり



白兔搗藥秋復春 姮娥孤棲與誰鄰

と歌ふ。其の次よりは翁も助言して

今人不見古時月 今月曾經照古人

古人今人如流水 共看明月皆如此

惟願當歌對酒時 月光長照金樽裏

とうたひをさめけり。其の後數獻に及びて、玉山頽るゝばかりに見えけり。』さて翁いふやう、『大かたは月をもめでじ』とはよみたれども、老の心も月みるにぞなくさみ侍る。されど其につきて千載無窮の感も起りぬれば、むへ月を『人の老となる』ともいふべかめり。但し月を見るにいろくあり。今思ひ出し侍る。童子の時、家にて八月十五夜の宴に、獨り隅に向ひて居たりしに、さる武士の一丁字知らぬが月をつくくと

(二)大かたは月をもめでじこれぞこのつもれば人の老となるもの  
(在原業平、古今集)  
(三)ながむるに物思ふことのながさむは月ほかりや行く(大江爲基、拾遺集)

見て『月は徑幾尺かあるべき。各考へて見たまへ』といふ。また同じやうの人かたへより『あれは物の切口とみゆ。奥へ長さいかほどかあらん』とて、たがひに僉議しけるを、さく人々皆舌を喰ひけり。翁もをさな心にをかしかりき。今おもへば、世俗月を賞して、光のあかきをほこり、影のきよきにめでて、良夜とてたゞ打寄り、物喰ひ酒のみなどして、歌ひのゝしるを樂とするは、かの寸尺を語るにひとしかりぬべし。また騷人墨客の月を詠めて、字毎に金玉を雕り、句毎に錦繡を裁するも、風雅には聞ゆれど、其もたゞ景氣の上を翫ふばかりにて、月に深き感ある事をしらぬなるべし。翁が千載無窮の感と申すは、わが儕、古人を慕ひて、其の書をよみ、其の心をしりつつ、常に世を隔たる恨あるに、月ばかりこそ世々の人を照し



來て今にあれば、古人の形見ともいふべし。されば月に對して昔を忍びては、さながら古人の面影もうつるやうに覺え、月はものいはねども語るやうにも覺え、忘れては、昔の事を問はまほしくも思ふぞかし。今李白が詩、月の景氣をすて、一氣に古今を洞觀して、『青天有月來幾時』といひ出づるより、氣象の高き拔群に聞えて、詩の豪蕩超逸なるも、外の詩人の及ぶべき事柄にあらず。昔より李杜とて杜甫が上に稱するも、ことわりにてこそ侍れ。然れども李白の詩も、古今流水の如きを感ずるまでにて、後代を待つ心の心は見えず。翁むかし楚辭(四)をよみて、『往者余弗及、來者吾不聞』といふに至りて、屈子(五)が心をおしはかりつゝ、感にたへずなん覺えし。此の二句の意をいふに、屈子一代に知己なきをかなしみて、古人は誠に

(四)楚辭の遠遊篇に見ゆ  
(五)楚の屈原

わが心を得たれば、あはれ一度あうて語らんと思へど、其の世に及ばねばかなはず。又末の世にさる人こそありて我と心を同じうすらめと思へど、其の人をきかねば、誰とか知らんとなり。是は屈子に限らず、古今心あるきは、大かた此の恨なきにしもあらず。翁も此の心にして月を見るにや、いほど感深く覺ゆるなり。もとより今は末の世の昔なれば、いづれの世にか、又わがごとく月に對して、今を忍ぶ人もやあらん。月はさこそ其の世をも照すらめ。もしあつらへ告げらるるものならば、月にさは一言をも残さましと思ひ侍る。そのころを、

月みれば末の代までもしのばれて

見ぬいにしへのいとゞゆかしき



こゝをもて翁が、月に無窮の感ありといへるを、諸君考へ見  
またへ。いはれなきにはあらず。」

一八 倭歌に感興の益あり

我が朝に歌あるは、もろこしに詩あるが如し。よりにて詩歌と  
て同じやうに、とりはやし候へども、我が朝は、昔よりもろこ  
しの文辭に疎く、李杜諸名家の詩をよむ人稀なり。たとひ讀  
みても其の旨に通じ難し。たま〜白居易の詩和かにて、倭  
歌の風にも適ひ、平易にして通じやすき程に、是を唐詩の上  
等として、このみて長慶集をのみ學びけらし。この故に其の  
詩皆膚淺粗俗にして見るにたらず。懷風藻本朝文粹など考  
へて知り給へかし。反つて近來五山老禪の賦する絶句の體

(一)白氏長慶集七十二卷  
(二)懷風藻一卷本朝詩集の始  
(三)本朝文粹十五卷藤原明衡編  
(四)京都の五山をさす天龍

寺相國寺建仁寺東福寺萬壽寺是なり義堂絶海等の老禪最も詩に巧なり

(五)(六)(七)唐詩選に見ゆ七言律抄出

の、一種澹泊の味ありて、取るべきにはしかず。然れば我が朝の詩は、すてゝ論ずることなかるべし。さて倭歌に至つては、我が朝の人之をもて性情を吟詠すれば、からやまと詞はかはれども、その所は變るべからず。詩は一首にて詞理ともに具足して、曲さに人情をつくしたれば、もとより三十一字の及ぶべきにあらず。翁若き時より盛唐の詩を好んで讀みて賈至が「早朝大明宮」の詩に

千條弱柳垂青鎖 百轉流鶯遶建章  
劍佩聲隨玉墀步 衣冠身惹御爐香  
と賦し、それを和して、王維が

九天閭闔開宮殿 萬國衣冠拜冕旒  
日色纔臨仙掌動 香煙欲傍袞龍浮

一八 倭歌に感興の益あり





と賦し、岑參が

金闕、曉鐘開萬戶、玉階、仙仗擁千官、

花、迎劍佩、星初落、柳拂、旌旗、露未乾、

と賦し、杜甫が

旌旗日暖龍蛇動、宮殿風微燕雀高、

朝罷香煙携滿袖、詩成珠玉在揮毫、

(八)杜工部集に見ゆ七言律抄出

(九)開元は唐の玄宗皇帝の年號

(一〇)詩經の國風周南の内

と賦するを見るに、文彩の烜赫たるのみにあらず、開元泰平の氣象目中有るが如し。かやうの所に至りて、倭歌の風情は、殆ど螢燭の日に於けるやうに覺え侍る。たゞその情に發する一ふしは、おのづから詩にかなふ所ありて、人心を起す益なきにあらず。國風、采芣の詩に

采采芣苢、薄言采之、采采芣苢、薄言有之、

といふがごとし。是は婦人のおほほこを采りて日をおくるを自ら賦したるなり。何のをかきふしもなければ、其の時代泰平にして婦人までも無事をたのしむの情、言外にあらはる。それにはからずしてかなひたるは、

百敷の大宮人はいとまあれや

櫻かざしてけふもくらしつ

(一一)新古今集、山邊赤人

(一二)延喜は醍醐天皇の年號、天曆は村上天皇の年號

とよめるにぞ、我が朝も延喜天曆の頃の、朝廷和平、群臣閑暇なりし事おもひやられて、いと感ふかく、采芣の詩によくかなひ侍る。其の外古今集の歌は、詞すなほに餘情ありて、多くは一唱三歎するにたへたり。

百千鳥さへづる春はものごとくに

あらたまれども我ぞふりゆく

(一三)讀人知らず



(二四)凡河内  
躬恒

此の歌を吟ずれば、老人の舊を懷ふ情を感じずべし。

春(二四)の夜のやみはあやし梅の花

色こそ見えね香やはかくるゝ

此の歌を吟ずれば、有徳の揜ふべからざる誠を感じずべし。

(二五)在平業  
平

世(二五)の中にさらぬ別れのなくもがな

千代もといのる人の子のため

此の歌を吟ずれば、孝子の親を愛するの情を感じずべし。

(二六)在原業  
平

忘(二六)れては夢かとぞ思ふ思ひきや

雪ふみわけて君を見んとは

此の歌を吟ずれば君子故舊を忘れざる情を感じずべし。此の

(二七)八代集  
は古今集後撰  
集拾遺集後拾  
遺集金葉集詞  
花集千載集新  
古今集

たぐひ、外にも尙多かるべし。古今集以後(二七)八代集に至りては、

あげて數ふべからず。中に翁が常に好みて吟ずる歌一首あ

り。鎌倉三代實朝の歌に、

(二八)金槐集  
に見ゆ

武士(二八)の矢なみつくろふ籠手の上に

あられたばしる那須の篠原

此の歌を定家卿評して、「鬼をとりひしぐ體」といはれしとぞ。

誠に勇壯をもて勝れたる歌なり。外に此の體の歌多く見え

侍らず。武士たる人常に此の歌を吟ぜば、その金革をしきね

にするの志を感じて、勇氣をすゝむべしとこそ思ひ侍れ。さ

て春秋のあはれをいひ、月花などを詠めし歌も、たゞ其のま

まに寫しとりて、さながら見るやうにあるは、なにのをかし

きふしもなければ、かの詞つゞきたくみに、よくいひかなへ

たると見ゆるよりは感ふかうして、すてがたく覺え侍る。今

思ひ出したる數首をもて例していはし。



(一九)古今集  
紀友則

(二〇)新古今  
集、藤原有家

(二一)新古今  
集、藤原良經

(二二)新古今  
集、源賴政

(二三)金葉集  
藤原經信

(二四)新古今  
集、藤原顯輔

久方(一九)の光のどけき春の日に

しづごころなく花のちるらん

朝日影(二〇)にほへる山のさくら花

つれなくきえぬ雪かとぞみる

うちしめりあやめぞかをる郭公(二一)

鳴くやさつきの雨のゆふぐれ

庭(二二)の面はまだかわかぬに夕立の

そらさりげなく澄める月かな

夕(二三)されば門田のいなばおとづれて

あしのまろやにあき風ぞ吹く

秋風(二四)にたなびく雲のたえまより

もれいつる月の影のさやけさ

(二五)新古今  
集、西行法師

(二六)新古今  
集、藤原定家、  
この佐野は大  
和にあり

(二七)無住法  
師の沙石集に  
見ゆ

津(二五)の國の難波の春は夢なれや

あしの枯葉に風わたるなり

駒(二六)とめて袖うちはらふかけもなし

佐野のわたりの雪のゆふぐれ

これらの歌、不盡の景氣をうつして、さながら目に見るがごとく覺え侍る。折にふれて是を吟詠せば、襟懷を清くし、塵想も遣りぬべし。西行が「わが佛法は、倭歌によりてすゝむ」といひし、さもありなんかし。わがともがらも吟詠をたすけ、性情を養ふにはたよりなきにあらず。されば倭歌のすてがたきは、こゝにあるべし。但しこのごろの歌は、新しくいひいでて、一ふしをかしくきこゆるはあれど、ことばの外にけしき覺えて、あはれふかきはなし。いかでか人の心を感興するの益

一八 倭歌に感興の益あり



あるべき。これも晩唐以後の詩のごとく、詞にのみもとめて、情に本づくといふ事をしらぬなるへし。何事も風俗の衰へゆくまゝに浮靡にながれて、實をとり失ひぬるこそ、なげかしき事なれ。詩歌のみに限るべからず。

### 一九 言は身の文

翁かねて思ふに、口を發する上にていへば言とし、言の連續する上にていへば語とし、語の模様をなす上にていへば辭とし、それを文字に寫す上にていへば文辭とす。然れば言語文辭同じものなり。但し後世文字の辭を文辭といふより起つて、文辭に限り文章といふは、古意を失ふのみならず、身に取りて文章の重きは言語にあり、文辭は其の餘事なること

(一) 易經の繫辭上傳に見ゆ  
(二) 論語の子張篇に見ゆ詩經大雅の抑之篇に曰く「白圭之玷、尚可磨也、斯言之玷、不可爲也」  
(三) 論語の先進篇に見ゆ  
(四) 左傳僖公二十四年に見ゆ  
(五) 論語の泰伯篇に見ゆ  
(六) 史記の滑稽傳に見ゆ優孟は楚の樂人なり楚の相孫叔敖に善遇せらる叔敖歿して後優孟叔敖に像る楚王左右別つこと能はず

を知らず。古より慎言の訓一にして足らず。孔子も「言行は君子の樞機、榮辱の主」のたまひ、子貢も「君子は一言もて知とし、一言もて不知とす」といひ、南容は日に白圭を三復しけり。之によりていふに、身の文章は言語より重きはなし。介之推が「言、身之文也」といひしを、深く其の理に當りたりといふべし。世の儒者と稱する人、多くは「辭氣を出して鄙倍を遠ざくる事をしらず。或は大言を恣にし、戯謔を好み、或は女色を論じ、貨利を議し、其の言をきくに、委巷の談の如く、奴隸の語に似たり。文雅風流いづくにかある。それにたゞ詩を賦し文を著し、琴を鼓し笙を吹いて、古人の文雅風流とす。たとひ文雅風流古人に似たりとも、優孟が孫叔敖を學ぶが如し。況や大いに似ざる者をや。誰か眞の孫叔敖とすべき。」座客の中にい



(七)山鹿素行の語類に見ゆ

ふは、兵家山鹿（七）の何がしが「世に士の金銀の事を口に沙汰するは鄙しき事といふは、大いなるひがごとなり。金銀はなくて叶はずして、至つて大切なる物なり。それを鄙しめ輕んずべきにあらず」とて、諸侯より金銀を贈れば、取つて戴きてさしおきけるとぞ。翁はいかゞ思ひ給へる」といへば、翁それは兵家利害の僉議よりいふにやあらん。士の道はさにはあらず。いかにとなれば士は義理より大切なるはなし。其の次には命を大切とし、金銀は又その次なり。此の二つも大切なるもの故に、やゝもすれば生死の場合、金銀の事に臨みては、かの義理といふ重きものを取り違ふるぞかし。よりて生を貪り利を貪る事をば、心に留めじ、口にもいはじと心づかひするは、士は、かりにも利欲に近づかじとなり。總じて利欲とい

(八)北窓瑣言卷四をさす

(九)牙儉は商人のかしらをいふ

ふは、金銀の欲に限らず。身の勝手を思ふは皆利欲なり。されば命は金銀より大切なるものにあらずや。勝手をもていはば、命をいくるばかり勝手のよき事はなけれども、義に臨みては塵芥よりも輕んずるは士の道なり。況や金銀に於てをや。元より大切の物なれば、常に身の養生を慎み、金銀もあらく費し用ひざるは、さもあるべき事なり。さればとて「命惜し金銀貴し」と、心に思ひ口にもいふは、商賈などには似合ひたるべし。士にはあるまじき事なり。むかし小説（八）の書にて見侍る。唐の柳公權が家に久しく召し仕ひし婢ありしが、柳家を出でて楊巨源が家に仕へしに、夫人絹を買ふとて自ら（九）牙儉と價の高下を議せしを見て、俄かに驚疾を得て楊家を謝し去りけり。其の後人に向ひて「われ多年柳家にありしに、終に



(一〇)内子は夫人をいふ

(一〇)内子の自ら物をかひ、物の價を問はれし事をきかず。然るに楊家の夫人牙儻と價を議せられしを見ければ、氣もけぬ様に覺えて驚疾を得たり」といひしとなり。柳氏はさすが唐の世族にて、家風いさぎよく、新進の家とは格別の事なんありける。されば中唐の頃には珍らしき事なればこそ、かく記し置けるならし。我が朝は君子國と稱せらるゝしるしにや、中古までは風俗淳素にして、貨利にひすかしからず。義理を堅く守るとにはなけれども、おのづから廉恥の風も亡びずなんありける。武家の世になりて、風俗大いに變ずといへども、士たる者は金銀の事をば常にいろはずして、しかも儉素質直にて、いさゝかおごりなかりき。近き頃までもしかなりある。老人の物語に、朝鮮陣の時、日根野備中守朝鮮へ使に行き

(一一)大寶元年粟田真人唐に使す唐人日本を贊して君子國と云ふ

(一二)江村專齋の老人雜話をさす

(一三)日根野高吉は美濃の人

(一四)黒田孝高創髮して如水と號す

しが、家貧しくして支度なり難ければ、三好新右衛門をもて黒田如水より銀百枚を借りけり。歸朝して後、新右衛門同道して如水の方へ行き、一禮をいひしに、如水對面して、姑くありて人をよびて、「さきに貰ひし鯛を三枚におろして、其の骨を只今吸物にして出せ」といふを兩人聞きて、心に不足しけるに、酒終りて、三好銀をとり出して返し、かば、如水「最初より貸しぬる心にてはなし。合力する心なり」とて、再三しひて返せども、受け取らずして止みぬ。飲食の事には、貰ひし鯛をも妄りに用ひず。しかも客のまへにていうて、いふまじき事とも思ひよらず。さて朋友急用の爲には、銀百枚を吝むべしともおもはず。是等の事にて、其の時代の士の風俗儉素質直にして、しかも義を忘れず、心事潔白なることを知るべ



し。翁わかき時の事を思ふに、其の頃までも年若き人などは、物の直段の事をば、かりにも口にいはず。女色の咄をききては、赤面する人もありけり。大かたは古戦軍術の事を聞きてよろこび、君父への奉公、武士の覺悟などを僉議せしぞかし。當代若き人の出合をきくに、多くは勝手損得のはなし、又は女色遊興の事を互に語りあうて、一座の慰とせざるはなし。この五六十年以前とは、格別の風にこそなり行きけれ。又其の頃、加賀に青地采女あまといひし士あり。其の子藏人といひし者は、翁が亡友なり。其の父采女が子弟にいひしとて、『人と物をかへて興とする事世にある事なれども、汝等必ずすべからず。かへまけて彼に得あるはよし。もしかへ勝ちて我に得ある時、碁象戯に勝ちたるとは違ひ、心ずみせぬものなり』と

(一三)新井白石

(一四)將軍家  
宣公正徳二年  
薨す諡して文  
昭院殿と號す

(一五)孝經に  
曰く「口亡擇  
言、身亡二擇  
行」

語りしこそ、心にくゝ覺えしか。當世は人と物をかへては、かへかちたりと喜び、又は、たかき者をいやしく買ひ得て、ほりだししたるなどといふは、商家のわざにして、士たる者のすまじく、いふまじき事なり。又先年新井筑後守(一三)がいひしを覺え侍る。人の噂をいふとて、しはき人とはいふまじき事なり。金銀にさへしはければ、命にはいよく、しはかるべしと知れたり。然れば臆病の唐名と聞ゆべし。侍講のとき、文廟(一四)へも申上げけり』とて語りし、尤も道理ある事なり。されば士は、一言の上にも心をつけて、利欲、臆病、好色等の筋の事をいはず、(一五)口に擇言無きをこそ、またなく見事なりともいふべけれ。かの世儒のいふ文雅風流も、こゝに求めば、道に中らずといふとも遠からじ。今身の言行をすて、いだづらに文辭の末に



(一六)詩經大雅の桑柔篇

(一)享保十七年壬子鳩巢時に七十五歳

(二)漢書の董仲舒傳に曰く「下帷發憤讀書、三年不窺園」

もとめて、聖賢の道こゝにありとす。これ、その好む所に僻して、自ら道に背くことをしらざるなり。しかしながら正學をみだり、後生をあやまるこそなげかはしけれ。詩(二六)にいはいはく「誰生厲階、至今爲梗」と、この謂なり。

### 二〇 壬子試筆の詞

日月迭に移つて、白駒の隙過ぎやすく、衰病日に侵して、黄金の術成りがたし。されば犬馬のよはひ是まであるべしとも思はざりしが、いつしか老の波より來て、ことしは七十あまり五つの春にもなりぬ。あまつさへ近き頃より身に痿疾を得て、手足もあがらず、起居もなやめるまゝ、昔の董生(三)を學ぶとにはあらねども、此の三とせ春の園を窺ふ事も叶はねば、

(三)鄒は孟子の生國魯は孔子の生國

(四)唐の韓愈宋の歐陽修

(五)論語の述而篇に曰く「不義而富且貴、於我如浮雲」

(六)賈誼の鵬鳥賦に曰く「禍之與福、何異糾纏」

(七)三綱は君臣父子夫婦をいひ五常は仁義禮智信をいふ

閨の中ながら梢につたふ鶯の音に、残りの夢をさまし、枕にかをる梅が香に、過ぎしむかしをしのぶばかりになんありける。しかはあれど幸に若かりし時より、學びの窓に年を経し甲斐ありて、程朱の道にしたがひて、鄒魯(三)の風をたづね、韓歐が文をこのみて、邯鄲の歩を學ぶにぞ、老の寢覺も慰みぬべき。さても多く年月を経て、世の移りかはる有様を考ふるに、盛衰榮枯互に行きかふをば、夢とやいはん、現とやいはん。誠に「富貴は浮べる雲の如く、禍福は糾へる繩の如し」といへるに、何か違ふ事あるべき。中に只吾が聖人の建て給へる三綱(七)五常の道のみ、天地と並び傳へ、古今のへだてなく、是ばかりは、かはることあるべからず。人として仰ぎ崇ぶべきは此の道ぞかし。然れども儒教世に行はれざりしより、人々義



理にうとく、利欲にさとくなる程に、五常の道廢れて、風俗日に下りゆくこそなげかしけれ。もとよりいやしき身にて、一代の風教を維持せんとすとも、わが力に及ぶべきにあらねば、ひとへに虻蜂の樹を撼かし、精衛が海を填むるに似たるべし。さはいへど、世を憂へ民を新にするも、吾が儒分内の事なれば、是を度外に置くべきにも非ず。いかなれば世に老師宿儒と稱する人の、好みて異説を肆にし、又は他道を雜へて、仁義五常の沙汰をば、よそにするこそうけられね。たゞ務めて新奇を競うて、俗耳を悦ばしめ、時好に投ずるなるべし。いと口惜しき事なり。古人のいはゆる「阿世曲學」とは、是等をいふなるべし。よし人はさもあらばあれ。たとひ風俗は昔にあらずなりぬとも、わが身一つはもとの如く、仁義の道を守り

(八) 山海經卷三に曰く「有鳥焉、其狀如烏、文首白喙赤足、名曰精衛」  
 (九) 老師宿儒とは關齋仁齋、徂徠、蕃山等をさす卷後の附録を參考すべし  
 (一〇) 史記の儒林傳に「公孫子務、正學、以言、無曲學、以阿世」と見ゆ

つゝ前修の模範を失はじと思ふこそ、せめて儒となりししるしともいふべけれ。しかるに新玉の春の初とて、人は皆己が志身の福を萬代といはふ中に、我はたゞ五常の道に心をよせて、いつもかはらず、めでたきものは此の道なりとて、かくなん筆をこゝろみるならし。

この春もかはらでゆかん七十に  
 あまる五つの道をたづねて

この筆記は、去年辛亥のとし春より冬に至るまで、諸生と語りし雑話を書き集むとて、ことし壬子の春より筆を起して、秋に至りて稿を脱しぬ。もとよりいやしき蚤のくづながら、もし朽ちずして吾が黨に永く傳はりなば、後學の身を省みる萬一の助にもならんかし。よりにて、ことし試毫の言葉を



末に附して、終りて復た始まり、無窮に及ぶの意をしめしけ  
るとぞ。享保壬子のとし冬十月鳩巢しるす。

國文抄本 駿臺雜話 終

室鳩巢在世時代略年表

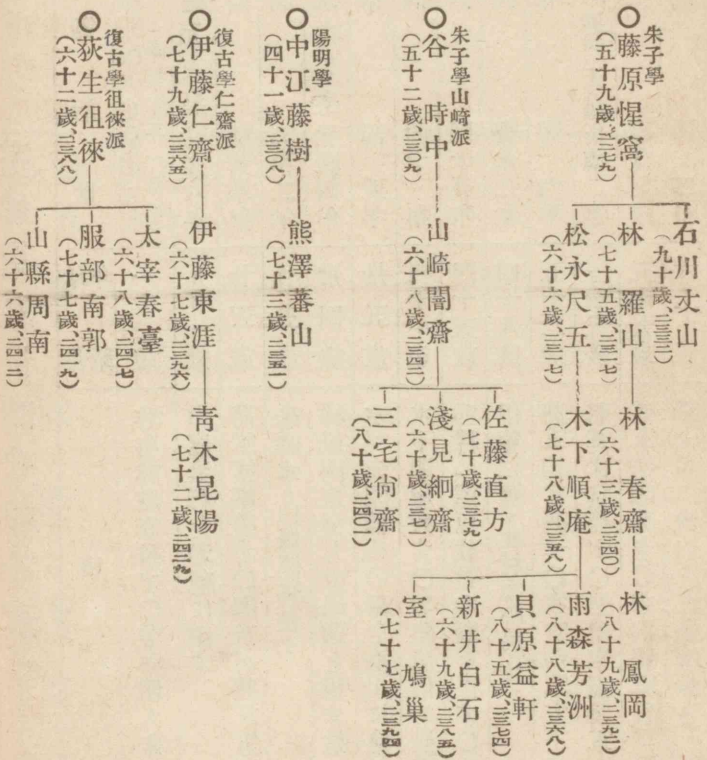
御治世	鳩巢年	事蹟
後西院天皇萬治元年 (皇紀二三一八年)	一歲	昨年林道春歿す○翌年明人朱舜水歸化す
靈元天皇寛文六年	九歲	山鹿素行を赤穂に錮す
同 延寶八年	廿三歲	將軍家綱薨す○綱吉同將軍宣下○林春齋歿す
同 天和二年	廿五歲	朱舜水・山崎闇齋歿す
東山天皇元祿四年	卅四歲	林鳳岡束髮し大學頭と稱す是より諸儒者束髮す
同 同 五年	卅五歲	水戸光圀楠公の碑を湊川に建つ
同 同 十一年	四十一歲	木下順庵歿す○翌年風俗の異様を戒む
同 同 十五年	四十五歲	赤穂の遺臣故君の讐を復す○昨年僧契沖寂す
同 寶永二年	四十八歲	伊藤仁齋・北村季吟歿す
同 同 六年	五十二歲	將軍綱吉薨す○家宣將軍宣下○翌年新井白石登用せらる
中御門天皇正徳二年	五十五歲	將軍家宣薨す○翌年家繼將軍宣下
同 享保元年	五十九歲	將軍家繼薨す○吉宗將軍宣下○一昨年貝原益軒歿す
同 同 二年	六十歲	諸大名に儉約と武備擴張とを面諭す○大岡忠相町奉行となる
同 同 五年	六十三歲	水戸より大日本史を獻す
同 同 十三年	七十一歲	一昨々年新井白石卒す○今年荻生徂徠歿す
同 同 十九年	七十七歲	一昨年林鳳岡歿す○今年鳩巢歿す

室鳩巢在世時代略年表 室鳩巢在世前後諸儒學統略譜



室鳩巢在世前後諸儒學統略譜

(享年幾歳の下の數字は、歿年の皇紀年次を示す)



明治四十三年十一月二十七日發行  
 明治四十四年二月廿四日訂正印刷  
 明治四十四年二月廿七日訂正再版發行

國文抄本奥附

定價 金貳拾五錢

編纂者 上田萬年

東京市下谷區谷中清水町十七番地

發行兼印刷者 大日本圖書株式會社

東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地

右代表者 專務取締役 宮川保全

東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地

大日本圖書株式會社

郵便振替貯金口座 東京 二一九番

各府縣下 特約販賣所

發行所





著新生先年萬田上士博學文  
書科教語國合統育教等中

<p>改大 版正 中學 讀本 文部省檢定濟</p> <p>全九冊</p> <p>定價 各卷 金貳拾五錢</p>	<p>學師 校範 國語 讀本 文部省檢定濟</p> <p>豫備科三冊 本科六冊 講習科四冊 檢定不要</p> <p>定價 各卷 金貳拾五錢</p>	<p>範女子 學校師 國語 讀本 文部省檢定濟</p> <p>豫備科三冊 本科五冊 講習科四冊 檢定不要</p> <p>定價 各卷 金貳拾五錢</p>	<p>國語 讀本 別記 文部省檢定濟</p> <p>全一冊</p> <p>定價 金參拾五錢</p>	<p>教中 科等 國語 法 文部省檢定濟</p> <p>全四冊</p> <p>定價 別卷 上中下各卷 金貳拾五錢</p>	<p>教中 科等 作文 法 文部省檢定不要</p> <p>全二冊</p> <p>定價 下卷 金五拾錢</p>	<p>教中 科等 國文 抄本 文部省檢定濟</p> <p>全十四冊</p> <p>定價 (各卷別記)</p>
---	---	---	---	--	--	--

社 會 式 株 書 圖 本 日 大



